

2008.10

HAMAMATSU UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE

NEWSLETTER



オリオン大星雲（技術部技術専門職員、鈴木孝征氏撮影 関連記事47ページ）

国立大学法人

浜松医科大学

<http://www.hama-med.ac.jp>

Vol.35
No.1

目 次

助産学専攻科

助産学専攻科の設置 学長 寺 尾 俊 彦 … 1

新 任 職 員 の 紹 介

一鷺の鳴き声からこおろぎの鳴き声に— 基礎看護学講座教授 加 藤 和 子 … 3
 ごあいさつ 地域看護学講座教授 鈴 木 みずえ … 4
 ごあいさつ 光量子医学研究センター特任教授 岡 崎 茂 俊 … 5
 「ごあいさつ」にかえて 外科学第二講座准教授 中 村 利 夫 … 6
 二人三脚 地域医療学講座特任教授 山 岡 泰 治 … 8
 御挨拶 地域医療学講座特任助教 古 本 尚 樹 … 8
 ご挨拶 臨床看護学講座准教授 永 井 道 子 … 9

海 外 医 学 ・ 医 療 事 情

国際法中毒学会アラン・カリー賞を受賞して 法医学講座教授 鈴 木 修 … 10
 英国留学記 ～モアフィールドアイホスピタル～ … 眼科学講座助教 朝 岡 亮 … 11

大 学 ニ ュ ー ス

一般ニュース（平成 20 年 3 月 1 日～9 月 30 日） 13
 優秀な留学生、研究者の獲得に向け、
 学長らが海外の協定校を訪問 14
 第 8 回慶北－浜松合同医学シンポジウム 14
 平成 20 年度（第 30 回）浜松医科大学公開講座 15
 学生ニュース（平成 20 年 3 月 1 日～9 月 30 日） 19
 サークル活動の記録 21
 サークル紹介 25
 〔水泳部 ラグビー部 東洋医学研究会〕
 留学生紹介 29
 〔Le Minh Tuyen、王博〕
 平成 20 年度入学者選抜状況 32
 平成 20 年度入学者選抜卒業年別内訳 33
 平成 20 年度入学者選抜出身高等学校等所在地別入学者数内訳 34
 第 102 回医師国家試験大学別合格状況 35
 浜松医科大学医学部医学科卒業生の医師国家試験合格状況（年次別） 36
 浜松医科大学医学部看護学科卒業生の保健師・
 看護師・助産師の国家試験合格状況（年次別） 37
 平成 20 年 3 月浜松医科大学医学部医学科卒業生の就職状況 38
 平成 20 年 3 月浜松医科大学医学部看護学科卒業生の就職状況 39
 平成 20 年度への進級状況 40

寄 稿

浜松医大での 33 年 9 ヶ月を振り返って
 前理事（教育・国際交流担当） 市 山 新 … 41
 国連での仕事 医学科 19 期生 難波江 功 二 … 43
 看護学科同窓会が設立しました 看護学科同窓会長 看護学科 1 期生 高 林 智 子 … 44
 さ ろ ん
 樹を楽しむ 生化学第二講座助教 佐 藤 英 二 … 45
 星空に魅せられて 技術部技術専門職員 鈴 木 孝 征 … 47
 この夏～助産師について 助産学専攻科講師 堀 田 久 美 … 49

海 外 渡 航 記

15th International Conference on Cancer Nursing に参加して
 臨床看護学講座助教 長 崎 ひとみ … 50
 ヨーロッパ麻酔科学会 2008（ESA2008）に参加して … 手術部准教授 白 石 義 人 … 52
 ポルトガルのポルトでポルテ 整形外科講師 高 橋 正 哲 … 54
 慶北大学校医科大学（韓国）での臨床実習 医学科 6 年 橋 口 俊 太 … 57

卒 業 生 だ よ り

看護学科入学から卒業後の軌跡 看護学科 1 期生（平成 11 年 3 月卒業） 辻 村 真由子 … 59
 広がる浜松医大の輪 看護学科 1 期生（平成 11 年 3 月卒業） ロゴム 尚 子 … 61
 拝啓 沖縄より。..... 医学科 20 期生（平成 11 年 3 月卒業） 畔 越 陽 子 … 62

助産学専攻科の設置

学 長 寺 尾 俊 彦

本学に、平成20年4月付けで、保健師助産師看護師法（保助看法）第20条第1号に定める学校として、助産学専攻科の設置が認可された。募集定員10名に対し25名の応募があり、試験の結果、10名が入学した。現在、看護学科学部教育課程にも助産学コース（定員は3年次、4年次に各6名）があるので、現在の3年次生が卒業するまでは、この2種類のコースで助産師養成を行なうことになる。

現在、全国的に助産師数が極めて少ない。看護師・准看護師の養成に比べて助産師の養成が遅れているからである。看護師・准看護師数は、昭和27年に約10万5千人であったが、現在は約120万人と12倍に増加した。一方、助産師数についてみると、昭和27年の就業助産師数約5万5千人が、現在は逆に約2万6千人と半減している（平成15年末）。そのため分娩施設の75%が助産師不足状態になっている。殊に、診療所における助産師不足は深刻な問題である。このような状況を背景にして昨年は、保助看法違反（看護師による内診問題）による起訴事件が、新聞紙上を賑わせた。この問題に関しては、看護師は助産の補助ができるという医政局長通知により結着をみたが、助産師不足は解消されていないので産科医師の負担は大きく、産科医療崩壊の原因のひとつになっている。

平成16年における分娩場所別にみた出生数は、病院575,138（51.8%）、診療所521,998（47.0%）、助産所11,289（1.0%）である。平成2年には病院681,873（55.8%）、診療所525,744（43.0%）、助産所12,521（1.0%）であったので、最近では病院での出生割合が減少し、診療所での出生割合が増加しているのがわかる。これは、地方自治体病院の産科医師不足による分娩取り扱い中止を原因として

いる。すなわち、診療所での分娩割合の増加は地方自治体病院の産科崩壊によるものと思われる。

助産師は病院にはいるが診療所では不足という極端な偏在によって、診療所医師の負担が大きくなり、これによって分娩取り扱いを中止した施設も増加した。そして結局、産科崩壊は病院でも診療所でも起こっているというのが現状である。

このような助産師の絶対数の不足が起こったのは、助産師の多くが高齢化したことと、助産師養成を怠ってきたことに依る。現在、助産師養成のための入学者数は年間1,666人で、そのうち大学へは520人（58大学）、短大・養成所は1,146人（61学校）が入学している。卒業後の就職状況についてみると、助産師として就業者は、1,343人、その内訳は病院1,308人（97.4%）、診療所30人（2.2%）、その他5人（0.4%）である。卒業者の大部分は病院に就職し、診療所への就職は僅かに30人にすぎない。また、現在の就業助産師の就業場所は、平成15年についてみると、病院17,684人（68.7%）、診療所4,534人（17.6%）、助産所1,604（6.2%）、看護師等学校養成所1,020人（4%）、市町村437人（1.7%）、保健所216人（0.8%）、その他232人（1%）、合計25,724人（99.9%）である。このように、産科診療所の助産師は全就業助産師の17.6%に過ぎないが、分娩の約半数が産科診療所で行なわれているのが実態である。

助産師不足は、静岡県においても例外ではなく、年間養成数は約30人に過ぎない（本学はそのうちの6人を養成してきた）。

現在、助産師の資格は、看護師免許取得者が、助産師学校などの養成機関で6ヶ月以上の専門教育と実習（規定数がある）を受け、国家試験を合格することによって与えられる。ただし看護系大学では、助産師に関する講義や実習を加えて行う

ことで看護師と同時に4年間の大学教育を経て受験資格をえられる大学も多い。最近では、本学のように、4年制大学に選択制の「助産」のコースを設置する大学が増加し、短期大学の助産専攻科や助産師学校は減少傾向にある。その大学においても少子化による分娩数の減少による実習困難や看護師養成教育の充実などを背景に、十分な助産技術が習得できないなどの理由から、近年は助産師教育を担う大学院（例えば天使大学大学院助産研究科）や大学の専攻科（徳島大学、本学）などが設置され始めている。また、2、3の医師会において独自の助産学専攻科を設置する動きもある。

以上の状況を背景に、本学でも専攻科を設置する運びとなった。2年後からは、本学の助産師養成は、この度新たに設置された専攻科だけで行なうことになる。その時の定員は15～20名が考えられる。

設置にご尽力いただいた久保田君枝准教授、安田孝子講師、担当事務局の皆さんに心より感謝申し上げます。



新 任 職 員 の 紹 介

— 鶯の鳴き声からこおろぎの鳴き声に —

基礎看護学講座教授

加 藤 和 子



浜松医科大学看護学科に5月中旬に就職し、4か月が過ぎました。着任当時は、春の終わりを告げるように宿舎の茂みで鶯の鳴き声が聞こえ、なんともいえない清涼感と安堵感を得たものでした。そして7月の暑い基礎実習には今まで聞いたことのないシャーシャーと急ぎたてるような蝉しぐれに送られて病院実習に通ったものでした。今はもう秋です。こおろぎや鈴虫の音色は、静かで寂しさを味わうものだと思っていた私の感覚を一変させ、暗い夜道の案内役に元気をもらっています。このような人工化していない自然の豊かな環境に恵まれた本大学のキャンパスは、私を都会の雑踏から離れて十分にリフレッシュさせてくれます。

年度途中での採用でもあり、とにかく走っている電車に飛び乗って、行く先を確認しながら、これではうまく到着できない？のではとこれまでの教育経験をこの時とばかりにフル活用し、修正、修正に毎日明け暮れなんとか前期を終わることができました。会議、会議の連続で、後期の授業計画、演習・実習の指導計画作成など、何とか見通しが着くところまでこられたことをうれしく思っています。

基礎看護学領域の先生方の快く頑張ってくださいの勢いに押されて、また陰ながら応援をくださる他領域の先生方に心より、感謝いたしております。何にも増して、看護学教育方法に対してしっかりと受け止め、やる気がドンドン高まってきている学生達の変化が最高のインセンティブになっています。

私は、臨床経験の後、30年間ほど看護教育の場で仕事をしてきました。ちょうど看護教育が専門学校から大学教育に移行する時代でしたから、新設大学の設置に関して関わる事が多く、そのため単身赴任で動いたものです。

主として、看護教育の先駆的役割を担った東京

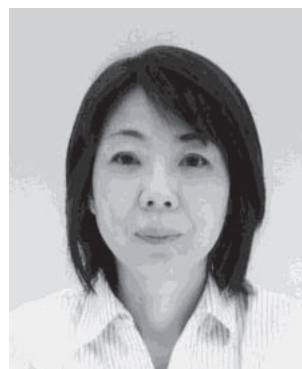
女子医科大学看護短期大学で小児看護学を、次に卒後継続教育として、日本看護協会看護研修学校で看護教育者や看護管理者の教育を経験し、その後横浜市立大学において、基礎看護学、山梨県立看護大学で小児看護学・看護現任教育・看護管理学、山形県立保健医療大学において基礎看護学・看護管理学で教鞭をとってきました。この間における医療、福祉の様変わりの現象に伴い、看護教育や研究も目を見張るような変化や進歩をとげてまいりました。

特に卒後教育の経験での看護現場で働いてきた方々との多くのふれあいや学びを通して、基礎看護学の時代にどのような教育をしておけば良いのかを検討し、教育と現場の新たなコラボレートを創造し、自立して仕事ができる元気なナースを育てていくための教育実践、研究活動に取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

ごあいさつ

地域看護学講座教授

鈴木 みずえ



平成20年8月1日付けで地域看護学講座教授を拝命致しました鈴木みずえでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今回、着任させて頂く以前に平成8年4月～平成15年3月まで浜松医科大学看護学科老年看護学講師～助教授としてお世話になりました。その後、三重県立看護大学に移動しましたが、今回、5年4か月ぶりに浜松医科大学に復帰させて頂くこととなりました。今回の移動に関して、教職員の皆様方には温かく迎えて頂き、大変感謝しております。

三重県立看護大学に在籍中の主な仕事としては、同大学の併設機関である地域交流研究センターの責任者を2年間併任させて頂きました。同センターは三重県民が生涯を通じて安心して暮らせる社会の実現など大学の地域貢献を目的に地域特性に応じた地域ケアシステムの研究開発、看護職者の資質向上のための継続教育を展開するところです。県立大学の使命ということから地域貢献の重要性を学びました。地域の住民および看護職の皆様方とのさまざまな活動の経験と人間関係は単なる地域貢献に留まらず、現在の私の貴重な宝になっております。看護系大学の教員としてもケアの実践現場を忘れてはいけないこと、研究のエビデンスを如何に実践現場の中に適応させて看護職や地域住民とともにケアの質を高めていくことが、私たち看護教員の使命であると実感しました。

前は臨床看護学講座老年看護学、今回は地域看護学講座に着任させて頂くことになりました。ますますの高齢化社会のわが国では、介護保険制度における介護予防事業、認知症対策など地域における高齢者に関する健康課題が増大しております。さらに介護保険制度の改正によって、要介護高齢者の療養の場も施設から在宅に移行されています。これらの状況の中で看護職だけではなく、

さまざまな職種と協働して地域に密着したケアシステムづくりが重要であると思います。私自身の教育・研究のキーワードは高齢者であります。高齢者だけをケアするのではなく、高齢者を取り巻く家族、そして地域の特性に基づいた、ケアネットワークをシステム化し、健やかな長寿社会の在り方について追及していきたいと思っています。移動前に本学で実施させて頂いた研究などを通してさまざまな連携などを基盤に、地域のケアの質の向上に向けた活動を展開していきたいと考えております。さらに先生方のご指導のもとで“転倒予防”、“認知症予防”をキーワードに臨床看護学講座、地域看護学講座といった枠組みや職種を超えた超高齢者社会の新たな高齢者ケアを創出し、浜松医科大学から全国に発信できればと願っています。

看護学科は設立13年目を迎え、さらなる分野のCNSや大学院博士課程なども今後の課題となるでしょう。微力ながらも本学の躍進に貢献できればと考えております。皆様方のご指導・ご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。

ごあいさつ

光量子医学研究センター特任教授

岡 崎 茂 俊



平成20年8月1日付けで光量子医学研究センター光化学治療寄附研究部門の特任教授を拝命しました岡崎茂俊です。浜松ホトニクス（株）中央研究所からの出向です。よろしくお願いいたします。

光化学治療寄附研究部門は、浜松ホトニクスによる寄附研究部門で、浜松ホトニクスと浜松医科大学との連携をスムーズに行うためのパイプ役となり、光技術を少しでも医学・医療の現場に役立たせることを目的としています。そのため、少しでも多くの浜松医科大学の皆様がこの研究部門や私のことを知っていただき、微力ながら研究に協力できればと思っています。

まずは自己紹介。私の出身は北海道です。中学・高校は苫小牧、大学は北海道大学理学部化学科、大学院は北海道大学大学院工学研究科合成化学工学専攻（博士課程）で、Langmuir-Blodgett（LB）膜中における色素分子の吸収の電場変調効果の測定や、ピコ秒時間分解蛍光測定によるLB膜中の色素の励起エネルギー移動の研究を行い、その縁（要はマニアックな光計測）で浜松ホトニクスに入社しました。

入社後、中央研究所第8研究室に配属になると同時に株式会社分子バイオホトニクス研究所（国と民間5社で行った6年間のプロジェクト会社）に出向。そこで、赤外分光法によるリパーゼの酵素活性のリアルタイムモニタリング法の開発、一重項酸素の近赤外発光検出による寿命測定や検出用化学発光試薬（CLAなど）との反応速度の測定、蛍光と化学発光の同時測定による細胞内カルシウムイオン濃度と活性酸素種産生の同時測定装置の開発などを行いました。

中央研究所に復帰してからは、一重項酸素の近赤外発光検出によるPDT薬剤の評価や近赤外ラマン分光法を用いた胃がん診断（第二外科今野教授との共同研究）、超高感度吸収分光法であるキャビティリングダウン法を用いた呼気分析（第二内科千田准教授との共同研究）など、浜松医科大学

の先生の協力のもと、研究を行ってきました。

一応、専門は光化学、分光学、分析化学ですが、会社では測定のための装置構築、調整に携わる時間が多いため、機械装置関連が専門とされているようです。

私は医療分野に関してはまったくの素人のため、この研究部門として皆様に何を協力できるのかまだ見当が付きません。しかし、光を用いた研究に関しては、装置構築や分光計測、スペクトルデータ解析などを得意としております。光を使って何かしたいことがありましたら、光化学治療寄附研究部門までお越しくください。できる限りの協力をいたします。これから皆様に少しでもお役に立てるよう励んでまいりますので、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

「ごあいさつ」にかえて

外科学第二講座准教授

中 村 利 夫

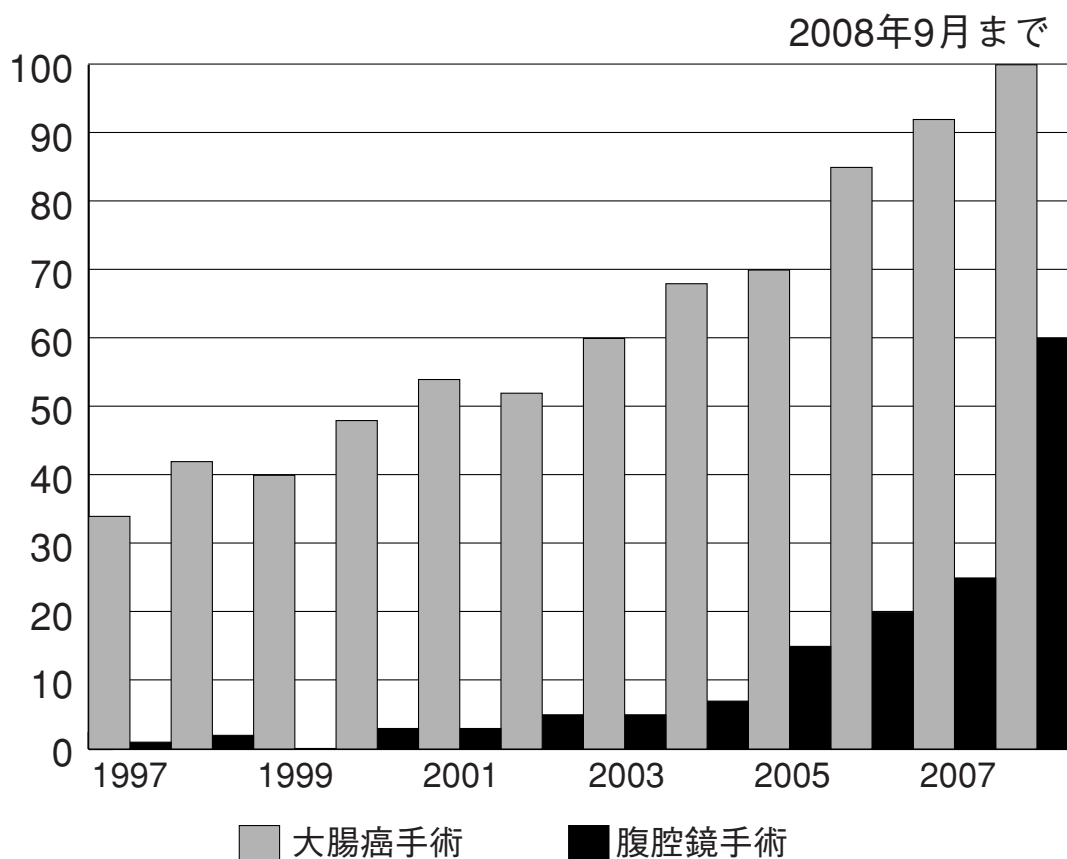


平成20年6月1日付けで外科学第二講座准教授を拝命しました中村利夫と申します。今を去ること25年前に浜松医科大学を卒業し、1983年附属病院に研修医として勤務し、以後東京、奈良、県内各地の関連病院に勤務した後、平成8年より大学病院に戻り現在に至っております。私が所属する第二外科では主に下部消化管外科で大腸癌と炎症性腸疾患を中心に診療と研究に従事してまいりました。今回News Letterの新任職員の紹介欄でごあいさつの機会をあたえていただきました。しかしながら取り立てて皆さんにお披露目すべきエピソードもない私自身の自己紹介に紙面を割くこと

は遠慮させていただき、私が専門としてきた消化器外科とりわけ大腸癌における診断と治療の最近の変遷についてこの紙面をお借りして皆さんにお伝えしようと思います。

大腸がんはご存じのとおりがんにおける死亡原因では女性では第1位、男性で第4位であり、しかもその数は年々増加傾向にあるといわれています。しかし一方で大腸がんは死亡者数の約2倍の

当科における大腸癌手術件数の推移



罹患者数が存在しているといわれており、治療により治る可能性が高いがんであることを示しています。また大腸がんの増加とともに診断、治療はめざましい進歩を遂げています。診断においては通常内視鏡に加えNBIという特殊内視鏡による観察も加わり腫瘍表面の詳細な観察が可能となっています。また高性能なCT（マルチデテクトCT）が導入されたことによりバーチャル内視鏡で大腸の中を視ることも可能になりました。また、治療の面においても腹腔鏡手術が多く行われるようになってきました。左のグラフは当科における大腸がん手術件数の年次推移です。この10年増加傾向にあります。とりわけ腹腔鏡手術が導入されたここ数年の手術件の増加は著しく、大学病院におきましても外科病棟スタッフや手術室スタッフの仕事量は急激に増加しているのが実態です。大腸がんの治療に腹腔鏡手術が行われることは世界的な傾向ですが、日本においても2002年より保険適応が拡大されてから飛躍的に増えており年間5,000件以上の手術が行われているといわれます。しかし現在もなお通常の開腹手術を大腸がん治療の中心におく施設は多く、理由のひとつとして腹腔鏡手術は歴史がまだ浅く、しっかりとしたエビデンスに基づいたデータがないことが挙げられます。これを受けて厚生労働省研究班による腹腔鏡手術の根治性を解析する臨床試験（JCOG0404）が2004年より行われています。これは大腸癌に対しこれまでの通常開腹手術と腹腔鏡手術を比較し、腹腔鏡手術が従来の手術に比べ治療成績で劣らないかを調べる試験であり、約1,000例が登録され、今年がその登録最終年にあたります。その結果がまもなく公表されようとしており、これにより腹腔鏡手術が開腹手術におとらないことが明らかになれば腹腔鏡手術を行う施設が増えることは確実でしょう。今後もし皆さまか皆さまのご家族に大腸がんが見つかったときどんな治療を選ぶか、主治医とよく相談して決めていただくことが重要となります。そんな時にお勧めする本としては「大腸癌治療ガイドライン」（金原出版）があり、わかりやすく解説されています。御一読下さい。ごあいさつに代えて、お読みいただいた皆さまの健

康管理の一助になれば幸いです。



二人三脚

地域医療学講座（寄附講座）特任教授

山岡 泰治

平成20年8月1日付けで地域医療学講座の特任教授を拝命しました。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

昨年10月に開設された当講座の目的、概要、そして私の経歴などにつきましては、すでにNews Letterでご紹介いただきましたので、今回は最近感じたことを綴ることにします。

先日、小学校の運動会がありました。我が子は駆けっこの競技で一生懸命走ったのですが、運動音痴が遺伝したのか、結果は惨憺たるものでした。しかし、クラス対抗の二人三脚リレーになると親の心配などど吹く風とばかり、予想外に颯爽と走っておりました。子供曰く、「二人三脚は

チームワークで勝負。自分は足が遅いけど、友達と気持ちを合わせて走ったんだよ」。この言葉、多くのことを教えてくれます。

当講座の活動も正しく二人三脚で進めるものです。以前のNews Letterで告白(?)しましたとおり、私は当講座開設から地域医療の研究に携わり始めました。しかし、一緒に組むパートナー、これは地域の医療機関、行政、あるいは本学の先生方であったりしますが、こうした方々と誠心和气を持って、何が真の 이슈かを考え、それを解決するためのビジョンを明確にした上で具体的なアクションに取り組んで行けば、必ず地域の医療を守り、安全で安心できる地域を形成することに貢献できるはずです。懸命に走る子供の姿を見て、ミッション完遂のために多くのパートナーと息を合わせて精励することを改めて決意した次第です。

では、この稿の後半は、私と二人三脚で研究に励んでくれている古本特任助教をご紹介します場とさせていただきます。



御挨拶

地域医療学講座（寄附講座）特任助教

古本 尚樹

平成20年5月1日付けで地域医療学講座の特任助教を拝命しました古本尚樹（ふるもとなおき）です。よろしくお願いいたします。

私自身現在、北海道大学大学院医学研究科社会医学専攻地域家庭医療学講座プライマリ・ケア医学分野（医療システム学）博士課程の最終学年に属しており、その研究テーマは「自治体合併と医療機能の変化」です。いわゆる平成の（自治体）合併後地方とりわけ過疎地と称される地域の医療・保健・福祉における課題を探索し、その改善に向けた指針を呈することを目標にしています。元来の研究フィールドは北海道内の過疎地であり、その地元自治体と協力して聞き取り調査を

行っていますが、地域医療の現実には財政難から起因するシステム・ネットワーク不備、情報の格差や職員の士気低下等、ひいては住民における不安を助長しています。こうした現状は我が国のいたるところ、特に地方部で共通する課題が少なくありません。この静岡県におきましても医療従事者等マンパワーの不足や、医療機関の統合における課題など、地域医療が円滑に遂行されるのに基盤となる分野へ対応するために医療ネットワーク化が不可欠と考えます。

一方、当静岡では発生が予想される東海地震へ医療面での対策が急務となっております。私は今年に入り岩手・宮城内陸地震など自然災害被災自治体の協力を得て、災害医療における課題とその対策を集約し、東海地震対策への応用を図るべく調査を継続しています。

「通常」の地域医療を住民にとり安心して受給でき、その「延長線上」に大規模災害への備えを構築すべく努力する所存です。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

臨床看護学講座准教授

永井道子



平成20年8月1日付けで臨床看護学講座の准教授を拝命いたしました永井道子と申します。平成16年10月から、精神看護学領域の講師を務めてまいりました。

私が精神看護を志すきっかけとなった出来事は、学生時代にさかのぼります。看護カウンセリングを専門としている先生と出会い、カウンセリングの理論を学び、先生による実践の素晴らしさと自分が実践することの難しさを痛感しました。とても興味をひかれ多くの書物を読み、研究室に通いました。人生経験が少ない若かりし頃の私にとってとても衝撃的な出会いであり、看護カウンセリングについて一生を通して学んでいきたいと思いました。その後も、悩みや不安を抱える方、精神疾患を持つ方とその家族の方々への心のケアを続けてまいりました。しかし、ある時、私自身が目指しているところの「心のケア」ができる看護者が、意外に育っていないことに気づきました。意外と申しましたのは、自分が受けた教育を他の看護者の方も受けているものと思っていたからです。そんな時、浜松医科大学から教育の場へ進む機会を与えられ、自分が受けた教育と培ってきた技術を後進に伝えていくことが可能となりました。平成9年に本学に来てからは、精神神経医学教室の勉強会に出席させていただいたり、研究のご指導をいただいたりと、最新の精神医療の場で研究の素晴らしさと可能性について実感し、日々研鑽を積むことができました。

現在、学部教育では、主に精神の健康と障害、医療、メンタルヘルス看護、精神科看護について講義を行っています。学生はこれらの講義を受けた後、3年生の後期後半から実習を行います。最初はおそろおそろ患者様と接していた学生が、実習が終わる頃には「今後の精神看護に何が必要で

あるか」「自分に何ができるか」を考えるまでに至る姿を見て、教育のやりがいを感じています。卒業研究では、自分の関心のある領域や対象者のメンタルヘルスについて学びを深めたいと考える学生が、精神看護学領域を選択してきます。また、看護カウンセリングに興味を持ち、積極的に研究室を訪ねてくれる学生もいます。我が国では、様々な領域でメンタルヘルス上の問題が明らかになっていますが、卒業生たちがそれぞれの領域で精神看護に取り組んでくれるものと思っています。今後も「心のケア」ができる看護者を育成していきたいと考えています。看護者が「心のケア」を実践することにより、多くの対象者の方が深刻な精神状態に陥る前に回復に向かうことができるのではないかと思います。そのような社会が構築されるよう微力ながら努力していきたいと思っています。

私自身の経験からも言えることですが、大学教育の場には、学生のその後の進路を左右するほどの様々な学問や教員との出会いがあります。大学は、人間を育てる可能性に満ちていると思います。その人間を育てる教育者の一員となれたことは、私にとってとても幸せなことです。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

海外医学・医療事情

国際法中毒学会アラン・カリー賞を受賞して

法医学講座教授

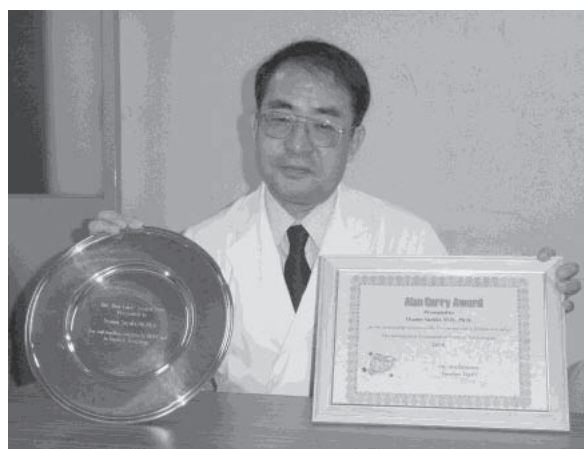
鈴木 修

まず法医学の中の「法中毒学」を説明しなくてはなりません。毒物類を対象研究する中毒学自体は（公衆）衛生学、病理学、臨床中毒学など広い分野にまたがっています。法中毒学では法律や倫理に直接的もしくは間接的に関係する中毒学を扱います。例えば、現在農薬入り餃子が世間を騒がせていますが、その農薬の濃度が残留農薬基準値を超えて、ヒトの健康を害する可能性が考えられる程度であれば（公衆）衛生学つまり保健所などの取り扱い対象となります。しかし、その農薬が故意に混入された可能性が出てくると、それは犯罪ですから、一変して法中毒学の分野に含まれることになります。また、故意に混入されたか否か不明であっても、餃子に含まれる農薬で中毒し、死亡すれば、それは外因死であり、法的に異状死となるのでこれも法中毒学が扱う対象となります。1994～1995のサリン事件、1998年の和歌山カレー重ヒ酸混入事件も社会を震撼させました。これらの事件では、「日本法中毒学会」のメンバーが大活躍しました。この日本法中毒学会は「国際法中毒学会TIAFT」の日本支部を兼ねています。

国際法中毒学会は1963年イギリスで創設され、その創設者がAlan Curry（アラン・カリー）博士です。現在国際法中毒学会は世界90ヶ国以上、1,400名以上の会員で構成されています。大学法医学、薬学関係、警察研究機関、軍研究機関、スポーツドーピング研究機関などの研究者で構成され、かなり学際的な学会といえます。

今年の国際法中毒学会総会は、カリブ海に位置する、フランスの海外県であるマルチニーク島で6月2～7日に開催されました。日本人参加者は私を含めて11名とやや少なめでしたが、最終日夜の晩餐会の席上で私のアラン・カリー賞の受賞が

発表され、私は突然の出来事に大変ビックリしました。あとで理事の一人に選考過程を聞いたところ、私の履歴や論文業績などすべて、インターネット上のデータで調べたとのことで、わざとサプライズ受賞にしたというのです。国際法中毒学会では多種類の賞を与えていますが、アラン・カリー賞は其中で最高位に位置するものとされ、毎年世界で一人が選ばれています。世界の法中毒学の進歩に顕著な貢献をすると同時に、国際法中毒学会にも貢献した者に与えられるとのことです。大変名誉なことと感謝していますが、これは私一人の力ではなく、私の周囲の先生方が支えてくれた結果と考えています。これは私の想像ですが、私がまだ若かった1984年に世界に先駆けて毛髪一本から覚醒剤を検出するのに成功し、その後、薬毒物毛髪分析が盛んに行われる様になりました。現在では国際毛髪分析学会（SoHT）まで開催されています。この1984年の研究が主な評価対象となったものと推測しています。私は「法中毒学」というユニークな学問分野に特別な思い入れがあり、この分野のさらなる発展を切に願っています。



英国留学記 ～モアフィールドアイホスピタル～

眼科学講座助教

朝 岡 亮

私は学術振興会特定国派遣研究員として平成18年7月1日から9月28日、平成19年7月10日から4月8日までの1年間英国ロンドンにあるモアフィールドアイホスピタルに留学していた。この間のことについて簡単にご紹介させて頂きたいと思う。

モアフィールドアイホスピタルは何と1804年創立の眼科専門病院で欧州随一の、世界有数の名門である。1804年と言えば無論江戸時代の、ペリーが来航する50年以上も前。こんな時代から常に世界のトップをリードし続けて来たというのは本当に凄い事だ。歴史をひも解くと、マーカスガン瞳孔のマーカスガン博士、梅毒のハッチンソン氏徴候のハッチンソン博士、角膜のボーマン膜のボーマン博士と眼科の教科書には必ず載っている偉い先生方が沢山居る。中でも極めつけは眼科のバイブル中のバイブル“System of Ophthalmology”をほぼ独力で書き上げた Duke-Elder 博士。この“System of Ophthalmology”は500頁以上の百科事典サイズが全50巻以上、索引だけで300頁以上に及ぶ超大作且つ不朽の名作で、この栄誉を称えられDuke-Elder博士にはSirの称号が与えられている。

この夢にまで見た留学に至る道は決して平坦ではなかった。通常医学留学は伝統的に教室と関係のある留学先に留学することが多いのだが、“留学先は自分の好きなのところを選択して良い”というご配慮をいただき、正直まさにゼロからの出発であった。まず2004年にイタリアで行なわれた欧州眼科学会でモアフィールドアイホスピタルの、後にボスとして師事させて頂く Dr. David Garway-Heath に、彼の教育講演終了後に“この後先生のラボを見に行っても良いですか？”と震える汗ばんだ手を差し出しながらアプローチ。アポも何も無い電波少年ばりの急襲であったためどうなる事かと本当に心配していたが、意外にもあっさり“いいよ”と言って頂いた。数日後ロンドンのモア

フィールドアイホスピタルの中にある彼のラボを訪れ、互いの研究テーマである緑内障の臨床研究に付いて色々と議論をさせて頂き、モアフィールドの伝統を兼ね備えたアクティビティー、ボスの Dr. Garway-Heath の人柄の良さ、そしてロンドンと言う街の魅力に触れることが出来た。実はここ以外にも幾つか留学先の候補はあり決め兼ねて居たのだが、モアフィールドを出る時には、絶対にここに留学したいと心に決めていた。

と言っても、ここから先もまだまだすんなり行った訳ではなく、教授、助教授のご指導のもとお金・スキルの条件を満たす為に足掛け4年苦勞した結果、幸いにも平成18年度の特定国派遣研究員に選出して頂くことが出来、晴れて留学生生活をスタートさせる事が出来たのだった。

滞在期間に行なった研究は、静的視野計の視標の再配置による緑内障検出能力の改善、画像診断装置による緑内障早期検出、角膜可塑性の緑内障に及ぼす影響の解析などであった。実際に何をしていたかと言うと、モアフィールド正常者友の会や緑内障患者さんに協力をお願いして対象者に病院に来て頂き、視野や画像解析装置の測定を行ない、結果を統計学的に解析すると言うものであった。たどたどしい英語であったにも関わらずボランティア精神溢れる方々のお陰で、のべ100人以上の方の計測を終了することができた。

実際に研究してみても一番驚いたのはタイアップしている数学チームのレベルの高さだ。Dr. Garway-Heath のチームはロンドン市立大学の数学チームと協力関係にあるのだが、彼らの能力たるや凄いものがあり、とてもじゃないけど医者が片手間にやっている統計解析なんかで太刀打ち出来るはずがないと実感させられた。臨床研究でも、世界のトップで行なわれているのは、こんなにもアカデミックなものなのかと感じ、検査機器開発メーカーがこぞってここで開発研究をしたがるはずだと了解した。

幸いにも良きボスと良き同僚達に恵まれ、一年という短い滞在期間であったにも関わらずこれらの研究は形にまとめ上げる事が出来、その一部は2008年の Association for Research in Vision and Ophthalmology、国際視野学会で発表する事が出

来た。（論文は投稿準備中）

医学の分野は、薬剤・機械に関わらず現状では残念ながら完全に輸入産業である。今回いただいたこの機会に得ることが出来た事を生かして、いつの日か日本から輸出出来るようなものを開発したいものである。

ロンドンでは世界から様々なものが集まる素晴らしい街で滞在の後益々好きになった。本当はロンドンで経験した研究以外の色々な事も紹介したいのだが紙面の都合上、残念ながら今回は割愛させて頂きたいと思う。最後になるが、このような機会をお与え下さった眼科堀田教授をはじめ医局の皆様はこの紙面をお借りして感謝の言葉を記させて頂きたいと思う。



Ryo（朝岡）



Seminor 打ち上げ

大学ニュース

一般ニュース（平成20年3月1日～9月30日）

- 3月17日 医学部の卒業式（学位記授与式）が行われ、182名（医学科112名、看護学科70名）が卒業した。
大学院の学位記授与式が行われ、課程博士21名、課程修士17名及び論文博士14名に学位記が授与された。
- 4月8日 医学部の入学式が行われ、医学科95名、看護学科60名及び看護学科第3年次（編入学）10名が入学した。
大学院の入学式が行われ、博士課程31名及び修士課程15名が入学した。
- 4月2日 } 新入生オリエンテーション（ガイダンス、健康診断、合宿研修、情報リテラシー、福祉施設体験実習等）を実施した。
17日 }
- 6月6日 開学記念行事
・講演会
・同窓会学術奨励賞授賞式
松井 啓隆（広島大学原爆放射線医科学研究所 助教）
中村祐太郎（第二内科 助教）
河崎 秀陽（病理学第二講座 助教）
・名誉教授称号授与式
市山 新（前教育・国際交流担当理事）
筒井 祥博（前病理学第二講座 教授）
・学生表彰 ボランティアサークル 四ツ葉
- 6月30日 } 県内高校生を対象に平成20年度専門基礎科目等授業開放を実施した。
7月11日 } （参加者78名）
- 19日 第30回公開講座開講式（開催日 7/19、7/26、8/2、8/9、8/23）
テーマは「健康のために知っておきたい話」
（参加者115名 延べ449名）
- 8月23日 第30回公開講座閉講式
- 27日 平成20年度厚生補導担当者研究会
- 7月20日 } 夏季休業
8月31日 }
- 9月17日 前期授業終了
- 18日 } 前期定期試験
30日 }
- 26日 第8回慶北一浜松合同医学シンポジウム開催

優秀な留学生、研究者の獲得に向け、学長らが海外の協定校を訪問

寺尾学長、辻副学長は、8月11日から15日まで、中国にある協定校4大学（上海交通大学医学院、河南中医学院、广西医科大学、中国医科大学）を訪問しました。

本学では、大学の国際化を推進し、優秀な留学生を獲得するために、今年度海外での現地入学試験を実施する予定です。今回の訪問は、各協定大学に赴き、その計画骨子を直接関係者に伝えるためです。

寺尾学長らは、上海交通大学医学院で朱正綱学長、河南中医学院で鄭玉玲院長、广西医科大学で黄光武学長、中国医科大学では趙群学長ら各学長及び国際交流処関係教職員等と相次いで懇談し、

学生の交流、学術研究分野での一層の協力関係強化について情報交換を行いました。

中国医科大学では、1988年に姉妹校協定を締結して今年が20年目にあたることから、本学主催による記念の懇親会を開催しました。懇親会には歴代学長（趙群学長、李厚文元学長、金魁和元学長、華桂嵐元副校長）、才越国際交流処長、潘伯臣国際交流処副処長をはじめとする中国医科大学教職員、並びに本学に留学していた元留学生が参加しました。

また、8月12日から15日まで、小出理事（教育・国際交流担当）はバングラデシュにある協定校2大学（ダッカ大学、ボンゴボンデュ セイクムジブ医科大学）を訪問し、学術交流について協議するとともに学生・研究者の交流推進について意見交換を行いました。

第8回慶北－浜松合同医学シンポジウム

9月26日に、慶北大学校医科大学・看護大学（韓国）から鄭聖光医科大学長、徐順林看護大学長、以下23名の教職員を迎えて合同医学シンポジウムを開催しました。

歓迎会で寺尾学長は、「このシンポジウムは、韓国・日本の優れた研究者がそれぞれ専門的な研究テーマについて発表し、最新情報を交換するよい機会。新たな共同研究を進めるためのネットワークを構築し、両大学の関係をより深めていくた

い。」と歓迎の意を伝え、鄭学長が、「両大学の持続的な交流が両国の医学発展に大きな役割を果たしていると確信している。今後もさらに交流が深まることを期待する。」とこれに応えました。

シンポジウムは、「臨床医学の画像技術」、「感染症と感染防御」、「外科の最新技術」をテーマにプレナリーセッションの後、基礎医学、臨床医学、看護学の各分科会が開催されました。発表された演題数は併せて39に上り、両国の最新医学研究が多数紹介されるとともに活発な意見交換が行われました。



平成20年度(第30回)浜松医科大学公開講座

下記の要領で平成20年度の公開講座が実施されました。

本学の公開講座は昭和54年から毎年開催しており、今年で30回目を迎えました。開催の趣旨は、「本学における教育・研究の成果を広く社会に公開し、開かれた大学として地域の皆様との率直な意見交換の場を設ける、併せて正しい保健衛生思想の普及と地域文化の発展に寄与する」です。

今回は総合テーマを「健康のために知っておきたい話」としました。今回の“健康のために知っておきたい話”は医療機関・医師との付き合い方、話題の感染症とその予防について、正しい薬の使用について、食と健康について、口腔衛生と健康について、生活習慣病を予防しよう、更年期障害を乗り越えるには、心の健康について、救命のリレー、女性のガンについてなど多岐にわたるものでした。

テーマ	「健康のために知っておきたい話」
会 場	浜松医科大学講義実習棟（1階）特別講義室
対 象	社会人、学生
申込者数	107名（修了証書を授与しない病院ボランティア 8名は除く）
修了証書授与者数	99名（92.5%） 3回以上受講された方に授与

●内 容

開催日時	14:00 ～ 16:00	
7月19日(土)	医療機関・医師との付き合い方 病院長 中村 達	話題の感染症とその予防について ーインフルエンザから結核までー 理事 小出 幸夫
7月26日(土)	正しい薬の使用について 薬剤部 教授 川上 純一	食と健康について 栄養部 栄養管理部門長 仲山 順子
8月9日(土)	口腔衛生と健康について 歯科口腔外科学講座 教授 橋本 賢二	生活習慣病を予防しよう 臨床薬理学講座 教授 渡邊 裕司
8月9日(土)	更年期障害を乗り越えるには 産婦人科学講座 教授 金山 尚裕	心の健康について 副学長 森 則夫
8月25日(土)	救命のリレー 救急医学講座 教授 青木 克憲	女性のガンについて 学 長 寺尾 俊彦



開講の挨拶をする小出理事



中村病院長の講座

☆アンケート集計結果☆

毎回、公開講座の最終回にアンケートを実施し、受講生のみなさまのご意見をいただいております。今回は79人の受講者の方々にアンケートをご記入いただきました。受講者の方々のご希望に添えるような公開講座となるよう工夫・改善していきたいと考えています。

平成20年度浜松医科大学公開講座に関するアンケート集計結果

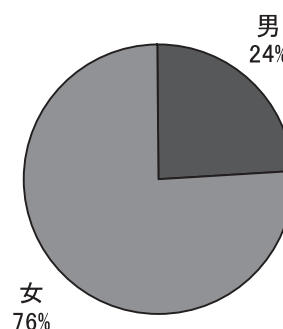
実施日 8月25日（最終日）

最終日受講者数 81人

回答者数 79人（97.5%）

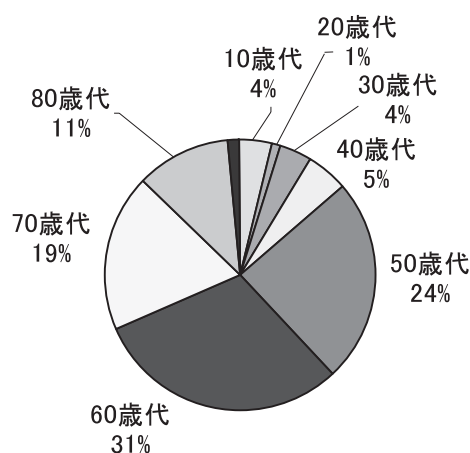
設問1：受講者の性別

	数(人)	割合(%)
男	19	24%
女	60	76%
合 計	79	100%



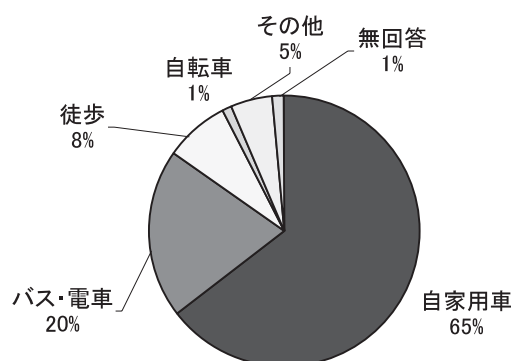
設問2：受講者の年齢

	数(人)	割合(%)
10歳代	3	4%
20歳代	1	1%
30歳代	3	4%
40歳代	4	5%
50歳代	19	24%
60歳代	24	31%
70歳代	15	19%
80歳代	9	11%
無回答	1	1%
合 計	79	100%



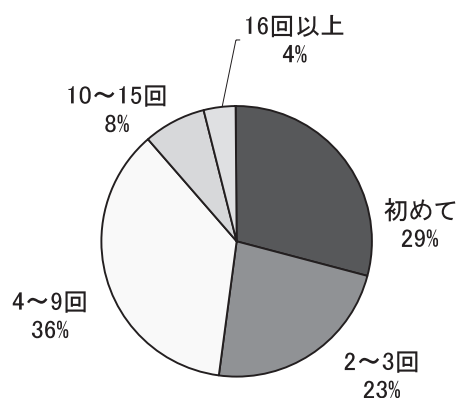
設問3：会場までの交通手段

	数(人)	割合(%)
自家用車	51	65%
バス・電車	16	20%
徒歩	6	8%
自転車	1	1%
その他	4	5%
無回答	1	1%
合 計	79	100%



設問4：今までの受講回数

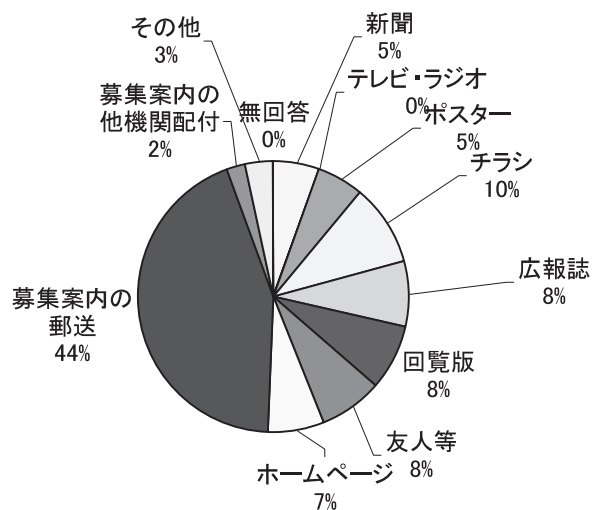
	数(人)	割合(%)
初めて	23	29%
2～3回	18	23%
4～9回	29	36%
10～15回	6	8%
16回以上	3	4%
合 計	79	100%



設問5：この講座を何により知りましたか？

	数(人)	割合(%)
新聞	5	5%
テレビ・ラジオ	0	0%
ポスター	5	5%
チラシ	9	10%
広報誌	7	8%
回覧版	7	8%
友人等	7	8%
ホームページ	6	7%
募集案内の郵送	40	44%
募集案内の他機関配付	2	2%
その他	3	3%
無回答	0	0%
合 計	91	100%

(複数回答あり)



熱心に受講する受講生

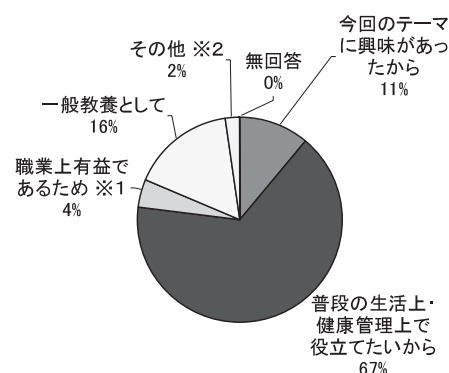


修了証書を渡す寺尾学長

設問 6：受講の動機は何ですか？

	数(人)	割合(%)
今回のテーマに興味があったから	10	11%
普段の生活上・健康管理上で役立てたいから	60	67%
職業上有益であるため ※ 1	4	4%
一般教養として	15	16%
その他 ※ 2	2	2%
無回答	0	0%
合 計	91	100%

(複数回答あり)



※ 1 の職業： 職業名無記名

※ 2 の内訳(自由記述)：

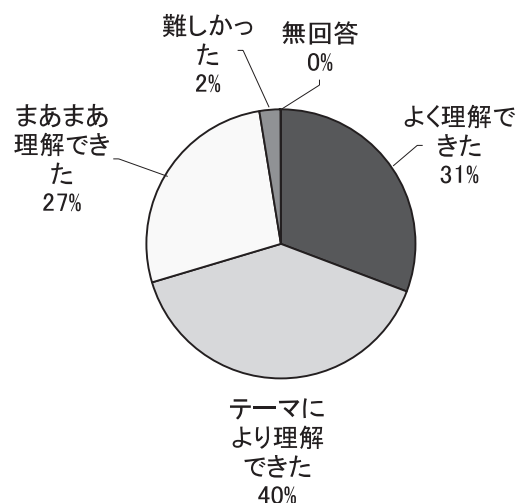
浜医大を受験するため、知識を増やしたかったから(10代、女性)

最新の医療関係情報の収集(60代、女性)

設問 7：講義内容は理解できましたか？

	数(人)	割合(%)
よく理解できた	25	31%
テーマにより理解できた	32	40%
まあまあ理解できた	22	27%
難しかった	2	2%
無回答	0	0%
合 計	81	100%

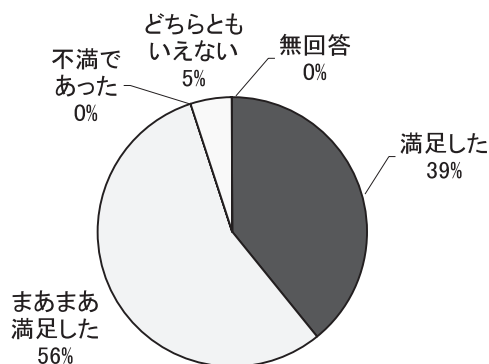
(複数回答あり)



設問 8：講義内容に満足できましたか？

	数(人)	割合(%)
満足した	31	39%
まあまあ満足した	44	56%
不満であった	0	0%
どちらともいえない	4	5%
無回答	0	0%
合 計	79	100%

(複数回答あり)



大学ニユース

4月14日 医学科5年次生の臨床実習が始まる。

5月10日 } 滋賀医科大学との第33回交流会が、浜松医科大学を当番校として行われた。10
) } 種目中7勝7敗で引き分け、通算対戦成績を浜松医科大学は13勝15敗5引き分
 11日 } けとした。

6月23日 } 第57回東海地区国立大学体育大会において総合成績男子8位、女子6位
{ (主管校 名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、参加校8大学)

7月8日 *主な成績 空手(女子) : 優勝
準硬式野球 : 2位
サッカー : 2位

7月10日 環境整備の一環として構内草刈りを行い、体育系サークル約165名、文化系サークル約19名が参加

7月25日 } 富士山8合目に、夏季期間中に開設される富士山衛生センターの診療補助者として、服部周平さん（医学科3年）外6名が従事
8月18日 }

7月30日 } 第60回西日本医科学生総合体育大会 総合11位
{ (代表主管校 広島大学医学部、参加校44大学)

8月12日 』 *主な成績 バドミントン (女子) : 優勝
空 手 道 (女子) : 優勝
ボ ー ト : 2位

平成20年度 第33回滋賀医科大学－浜松医科大学交流会 競技結果

平成20年5月10日(土)～11日(日)

種 目		滋 賀		浜 松	
硬式庭球	男	×	2	－ 7	○
	女	○	5	－ 0	×
サッカー		×	1	－ 3	○
準硬式野球			中 止		
バスケットボール	男	○	73	－ 51	×
	女	○	53	－ 39	×
バレーボール	男	○	2	－ 1	×
	女	○	2	－ 0	×
バトミントン	男	×	2	－ 3	○
	女	×	0	－ 5	○

種 目	滋 賀		浜 松		
ヨット	○	17.4	－	53.4	×
ボート	×	1	－	4	○
ハンドボール	○	28	－	19	×
空手道	×	1	－	2	○
ゴルフ	×	475	－	462	○
総 合 結 果					
滋 賀	7	対	7	浜 松	

※ 通算 (浜松医科大学) 13勝 15敗 5引き分け



サークル活動の記録

平成19年度（平成19年4月1日～平成20年3月31日）

準 硬 式 野 球 部	春季県内リーグ 2勝4敗
	東海地区国立大学体育大会 出場
	東海選手権 出場
	医科リーグ 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場
	秋季県内リーグ 2勝4敗
男 子 硬 式 庭 球 部	全日本大学対抗テニス王座決定試合東海地区予選東海大学対抗
	テニスリーグ第4部 第2位
	東海国公市大学体育大会 第3位
	西日本医科学生総合体育大会 ベスト8
女 子 硬 式 庭 球 部	東海地区国立大学体育大会 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場
	コメディカル大会 第4位
	麻生杯 個人戦：ベスト16
	県 学生 個人戦 シングル：ベスト8、ベスト16 各1名
	個人戦 ダブルス：ベスト8 1組
ソ フ ト テ ニ ス 部	東海医歯薬大会 出場
	女子団体：準優勝
	女子個人：ベスト16(山本・田中、岡崎・保坂)
	男子個人：ベスト16(小池・関、永田・片橋)
	西日本医科学生総合体育大会 女子個人：ベスト8(山本・京野)
	男子個人：ベスト32(赤堀・関)
男子バスケットボール部	全日本医科学生総合体育大会 女子個人：第3位(山本・京野)
	春季東海地区医歯薬大会 出場
	東海地区国立大学体育大会 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場
女子バスケットボール部	秋季東海地区医歯薬大会 出場
	春季東海地区医歯薬大会 出場
	四校戦 出場
	東海地区国立大学体育大会 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場
	秋季東海地区医歯薬大会 出場
男子バレーボール部	西日本医系女子 出場
	東海医歯薬リーグ 優勝
	東海医歯薬大会 ベスト8
女子バレーボール部	日本医歯薬大会 出場
	近畿医療系女子バレーボール大会(春期大会) 出場
	近畿医科学生女子バレーボール大会 出場
	東海地区国立大学体育大会 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場
	近畿医療系女子バレーボール大会(秋期大会) 出場
バ ド ミ ン ト ン 部	東海医療系バレーボール大会 出場
	静岡県大学バドミントン選手権大会(第31回) 女子団体：準優勝
	西日本医科学生総合体育大会 女子団体：優勝
	近畿東海医科学生バドミントン大会 女子団体：第3位
ラ グ ビ ー 部	静岡県大学バドミントン選手権大会(第32回) 女子団体：優勝
	東海医歯薬リーグ 出場
	西日本医科学生総合体育大会 出場

サ ッ カ ー 部	春季東海医歯薬サッカー大会	優勝	
	静岡県大学学生リーグ大会	準優勝	
	秋季東海医歯薬サッカー大会	決勝トーナメント進出	
ハ ン ド ボ ー ル 部	西日本医科学生総合体育大会	第4位	
剣 道 部	西日本医科学生総合体育大会	団体戦：ベスト16	
	中部医歯薬大会	出場	
	東海地区国立大学体育大会	出場	
空 手 道 部	東海地区学生空手道選手権大会		
	＜個人戦＞	女子形の部：第3位	
	春季東海地区学生空手道選手権大会		
	＜団体戦＞	女子団体：第3位	
	＜個人戦＞	女子形：第3位	
	東海地区国立大学体育大会		
	＜個人戦＞	男子：優勝、準優勝	
		女子：優勝、準優勝	
	＜団体戦＞	男子：優勝	
		女子：優勝	
	西日本医科学生総合体育大会		
	＜個人戦＞	男子：準優勝、第4位	
		女子：優勝、第3位	
	＜団体戦＞	男子：準優勝	
		女子：優勝	
	西日本コメディカル(女子)	団体優勝	
		個人：第3位	
	和道会静岡県空手道選手権大会		
	＜一般男子＞	個人：ベスト8	
	＜一般女子＞	個人：準優勝、ベスト8	
		個人・形：優勝	
	和道会東海空手道選手権大会		
	＜団体戦＞	男子・組手：ベスト8	
	＜個人戦＞	女子・形：優勝	
	和道会全国空手道選手権大会	女子団体：第3位	
	＜一般女子＞	個人：ベスト8	
		個人・形：優勝	
	秋季東海地区学生空手道選手権大会		
	女子団体：第3位		
ヨ ッ ト 部	西日本医科学生総合体育大会	470級：第6位	スナイプ級：第6位
	総合：第5位		
	小春レース(浜松市ヨット協会主催)	入賞	
	市スポーツ祭(浜松市ヨット協会主催)	入賞	
漕 艇 部	朝日レガッタ	準決勝進出	
	静岡県選手権	男子対抗：優勝	
		男子ダブルスカル：優勝	
		女子クオドルプル：優勝	
	中部学生選手権	男子対抗：第5位	
		男子ダブルスカル：第5位	
	西日本医科学生総合体育大会	男子対抗：第3位	
		男子ダブルスカル：準優勝	
		女子クオドルプル：第3位	
	中部学生新人	男子かじ付きフォア：第4位	

ゴルフ部	西日本医科学生総合体育大会 団体：第7位入賞
	関西医歯薬新人戦 第10位
弓道部	中部ブロック医科学生弓道大会
	＜団体＞ 男子：優勝
	女子：準優勝、第3位
	＜個人＞ 男子：第6位(生駒)
	西日本医科学生総合体育大会
	＜団体＞ 男子：準優勝
	女子：第6位
	西日本看護学生弓道選手権大会
	＜団体＞ 準優勝
	＜個人＞ 男子：第3位(清水)
	男子：最多的中賞(平井)
	東海医歯薬弓道大会
	＜団体＞ 男子：優勝
	女子：準優勝
	＜個人＞ 男子：優勝(生駒)、第4位(鈴木)、第6位(齊藤)
	女子：第5位(村松)
	春季県下学生弓道大会
	＜団体＞ 男子：優勝
	女子：優勝
	＜個人＞ 男子：第3位(生駒)、第4位(平井)、第5位(上中)
	女子：第5位(本多)
陸上競技部	西日本医科学生総合体育大会
	男子棒高跳：第1位(加子 三連覇)
	男子砲丸投：第3位(有賀)
	男子フィールドの部：第4位
	女子走幅跳：第3位(上里)
	関西医歯薬科学生対抗陸上競技大会
	男子110mハードル：第2位(赤羽)
	女子800m：第2位(菅澤)
	女子4×100mリレー：第2位(齊藤、桑原、上里、栗原)
	女子総合：第7位
	女子トラックの部：第5位
	東海地区国立大学体育大会
	男子110mハードル：第3位(赤羽)
	男子砲丸投：第5位(有賀)
	全日本医歯薬獣医大学対抗陸上競技選手権大会
	男子110mハードル：第2位(赤羽)
	男子砲丸投：第3位(有賀)
	女子800m：第6位(菅澤)
	女子走幅跳：第3位(上里)
水泳部	東海地区国立大学体育大会
	＜男子＞
	50M(自由)：第5位(藤本)
	100M(自由)：第3位(藤本)
	100M(平泳ぎ)：第6位(立山)
	200M(平泳ぎ)：第5位(立山)
	400M(個人メドレー)：第4位(小田)
	800M(リレー)：第5位(小田、村上、加藤、藤本)

水 泳 部	<女子>
	50M(自由)：第5位(杉山)、第6位(武藤)
	50M(平泳ぎ)：第5位(近藤)、第6位(木村)
	50M(背泳ぎ)：第5位(荒山)
	100M(自由)：第5位(杉山)、第6位(津田)
	100M(平泳ぎ)：第4位(市川)
	100M(背泳ぎ)：第5位(武藤)、第6位(清水)
	200M(自由)：第5位(大槻)
	200M(個人メドレー)：第4位(荒山)、第5位(藤本)
	200M(リレー)：第4位(近藤、武藤、杉山、大槻)
	200M(メドレーリレー)：第4位(武藤、市川、津田、杉山)
	400M(自由)：第3位(大槻)
	400M(リレー)：第4位(荒山、津田、武藤、杉山)
	西日本医科学生総合体育大会
	<男子> 総合：第5位
	100M(自由)：第4位(藤本)
	200M(自由)：第5位(加藤)
	200M(バタフライ)：第5位(露木)
	200M(個人メドレー)：第4位(小田)
	400M(個人メドレー)：第4位(小田)
	800M(リレー)：第3位(小田、村上、加藤、藤本)
	<女子>
	50M(背泳ぎ)：第5位(武藤)
	200M(メドレーリレー)：第3位(武藤、近藤、藤本、石田)
	西日本コメディカル学生水泳競技大会
	<女子>
	50M(平泳ぎ)：第5位(市川)
	100M(平泳ぎ)：第3位(市川)
	100M(背泳ぎ)：第5位(清水)、第6位(荒山)
	200M(自由)：第5位(大槻)
	200M(個人メドレー)：第4位(荒山)
	200M(リレー)：第4位(大槻、後藤、清水、荒山)
	200M(メドレーリレー)：第4位(荒山、市川、清水、大槻)
	400M(個人メドレー)：第4位(大槻)
	400M(メドレーリレー)：第4位(荒山、後藤、清水、大槻)
卓 球 部	西日本医科学生総合体育大会
	<男子> ダブルス：ベスト32 シングル：ベスト32
邦 楽 部	静岡県三曲連盟(第40回)定期演奏会に出演
管 弦 楽 団	定期演奏会の主催
	サマーコンサートの出演(本学附属病院、遠州病院)
	クリスマスコンサートの出演(本学附属病院、遠州病院)
	本学主催の入学式、解剖体慰霊祭、学位記授与式の出演
東 洋 医 学 研 究 会	東百会への参加
写 真 部	東海地区国立大学文化祭への出品
奇 術 部	マジックショーの主催(本学附属病院)
世 界 保 健 研 究 会	A C L S 勉強会への参加
	(京都大学、愛知医科大学、佐賀大学、藤田保健衛生大学)

〔水泳部〕

こんにちは。水泳部です。

学内の皆さんでしたら、「水泳部」と聞いてまず思い浮かぶのは、その部員の多さではないでしょうか？

事実、現在男女合わせて75名が在籍しています。このような大所帯では、同じ学年同士は勿論、たくさんの先輩・後輩と関係を築くことができます。大学生活には、やはり人とのつながりが欠かせません。その点、水泳部は大学生活に、自ずと活気をもたらしてくれます。

それでは、そもそもなぜ水泳部に人が集まるのでしょうか？

部員それぞれに入部した理由があるとは思いますが、ここで大きく2つ紹介したいと思います。

1つ目は、自分のペースで練習が出来ること。シーズン中は毎日プールが開いています。そのため、週に一度泳ぎたい部員から毎日泳ぎたい部員まで、それぞれが好きな頻度で部活に訪れます。

さらに、それぞれ自分の力量や体調に合わせて、軽いものからハードなものまでメニューを選ぶことが出来ます。タイムが速くなったら、一つ上のメニューを選んでみたり…。それも自分を向上させる楽しみです。

そして泳ぎ方を教わりたい時は、泳ぎのうまい

部員に聞けば皆親切に教えてくれます。平泳ぎを得意とする人、バタフライを得意とする人…講師は選り放題です。これもまた、大所帯であるからこそなせる業でしょう。

また、泳ぎは速くないけれど健康のために、といった参加も可能です。筆者も週に1, 2回の参加ですが、勉強で溜まったストレスを晴らすために、凝り固まった身体を解すために、とプールへ足を運んでいます。

このように書くと、「水泳は個人競技だし、部員同士団結しているのか？」と思われがちですが、同じプールでメニューをこなす仲間、タイムを少しでも縮めようと頑張る仲間です。お互いが相手の成長に刺激され、また、応援し合っています。そんな様子が顕著に表れるのが大会。観客席にいる部員全員が、声を張り上げて泳者の応援をします。そのため、大会の後は声が枯れている事もしばしば…。

2つ目は、秋から春にかけてオフシーズンであること。

毎年大体5月から8月がオンシーズンです。

(2007年の場合)

- 4月末 : プール掃除=シーズンスタート
- 5月 : 滋賀医大戦
- 6月 : 名市大対抗戦、東国体
- 7月 : 中部インカレ
- 8月 : 西医体、西コメ
- 9月 : 納泳会=シーズンの終わり

水泳部はこの短い夏の期間に、凝縮して部活を





最後に記念写真 東国体



全員集合！ 2008名市大対抗戦

行います。実に短期集中型と言えるでしょう。

そして迎えるオフシーズン。他の部活と兼部している部員は、今度はその部活に力を注ぎます。バイトや趣味に精を出す部員もいます。みっちり勉強に勤しむこともできます。

こうした一年間のメリハリが持てる事が、水泳部のもう一つの魅力なのです。

今年もこの魅力に惹かれて、たくさんの一年生が入部してくれました。

そして2007年、水泳部一同はどこよりも熱い夏を満喫しました。来シーズンは更に熱い夏をプールで過ごしたいですね。

部員一同、これからも頑張ります。

〔ラグビー部〕

こんにちは、ラグビー部です。現在、24名の部員と15名ほどのマネージャーが在籍しています。チーム全体の雰囲気は良く、部員とマネージャーが一丸となって、日々の練習に励んでいます。ラグビーという競技があまり普及していないためか、チーム内での中学、高校時代の経験者は少なく、各学年に1人いる程度です。ほとんどの部員は大学に入って初めてラグビーに触れる人ばかりで、運動部に入っていなかったという部員もいます。2008年度は多数の新入部員、マネージャーを迎え、雰囲気もより一層活気のあるものとなりました。

ラグビー部の活動は基本的に週3回で、医大グラウンドにて練習を行っています。また浜松大学のグラウンドを借りて、浜大ラグビー部との合同練習を行うことも時々あります。東海リーグレベルのチームと共に練習することで、部員たちにもいい刺激になっています。試合での勝利に向けて、基礎体力の強化、効果的なオフense、ディフェンスシステムの構築や様々なセットプレーの練習を行い、互いに切磋琢磨しながら練習に励んでいます。

ラグビーという競技は1チーム15人、一試合で30人が入り乱れ、ボールを奪い合う激しいスポーツです。そのため、ポジションの数も多く、プレーヤーは自分にあったポジションでそれぞれの個性を伸ばすことができます。練習は主に全体練習と、FW（フォワード）とBK（バックス）のボ



ポジションごとに分かれて行う練習の二通りがあります。全体練習は、楕円形のボールに慣れるところから始まり、パスやタックル、ミニゲームなどを行っています。部員同士で互いにタックルフォームの確認や、パスのコツなどアドバイスする工夫をしています。ポジション練習では、スクラム力の強化や効果的な戦略作りに努めています。また、個人練習として筋力トレーニングを取り入れています。学年があがるにつれて講義も忙しくなったりと練習時間に十分な時間を確保できないこともあります。限られた練習時間を有効に使い、自分に必要なスキルを積極的に身につけていかなければなりません。自らに妥協せずメニューをこなすのは辛く大変ですが、練習をやり遂げることで強い精神力、忍耐力を養えると思います。

遠征などの試合の後には打ち上げをしたりします。ラグビーの競技の性質上、個人技によって勝利がもたらされることは少なく、プレーヤー一人一人の自己犠牲の元、ようやく点をきめることができるようなことも多々あります。打ち上げではこうしてチーム全体が一丸となって手に入れた1点、1勝を皆で祝い、試合を終えた充実感から楽

しく盛り上がることが多いです。



最近では日々の練習の成果が実り始め、チームの実力が向上しているように見られます。2008年度の西日本医科学学生総合体育大会においては惜しくも初戦敗退となってしまいましたが、キックと激しい連続攻撃を活かしたオフェンシブなチームスタイルができつつあり、練習試合での勝利数は明らかに増えてきています。

次の年度では4月に始まる東海医歯薬大会をはじめ、夏の西日本医科学学生総合体育大会に向けて、個々の体力精神力を高め、チーム全体より一層の結束を固め、部員マネージャー一同練習に励んでいきたいと思っています。



〔東洋医学研究会〕

こんにちは、東洋医学研究会です。私たちは週に2回の活動を行っています。活動とはいっても昼休みに行くため、誰でも気軽に来ることができます。具体的には学生による講義形式を採用した東洋医学の学習を柱としています。言い換えるならば「学生の学生による学生のための講義」とも言えるかもしれません。単に一人一人自分で勉強するというのも一つの勉強の形ではありますが、自分が他者に説明することにより、よりよい学習ができるのではないかと思います。加えて発表する力を学生のうちからつけておくことは社会に出てから非常に有用なことでもあります。

こう書いてしまいますと非常に厳かな雰囲気が講義中に漂っているのでは？とお思いになられる方もいらっしゃると思いますが、実際はお昼ご飯を食べながら、時には東洋医学以外の話題にも花を咲かせる、和やかな雰囲気の講義です。

個性という言葉も東洋医学研究会では際立つと思います。部員一人一人、何かしら得意な分野・好きな分野があり、そこには同時に多種多様な価値観があります。

さて、先に述べました講義形式の他にも年間を通していろいろなイベントがあります。

例えば、新入部員歓迎を兼ねた旅館花月井での1泊2日の温泉旅行。顧問の永田先生による漢方の講義を聞くことができます。永田先生のお話には不思議と、つつい引き込まれてしまいます。加えて女将さんのおいしい料理・温泉・カラオケ

等楽しめる企画が満載です。

また、他大学との交流の場としては東百会とよばれるいろいろな大学の東洋医学研究会の集まりがあります。これは春と夏、年2回行われ、他大学との情報交換および友好を深めることができます。研究発表等をするため、東洋医学研究会のメインイベントと言ってもいいかもしれません。



夏の東百会 in 浜松

他にも医大祭での出店（わたがし）、追い出しコンパなど、いろいろなイベントがあります。

近年、東洋医学の必要性が叫ばれています。どうしても日本において医学部の勉強は西洋医学が内容の大半を占めます。社会に出てからでも勉強する機会はもちろんあるでしょうが、時間という物理的要因はそれを制限する確率が高いと言っていいと思います。そのため、勉強を好きなだけで学生という期間のうちに東洋医学の知識を少しでも多く身につけておけば、という心構えの下、私たちは活動しています。（もちろん勉強以外の活動も大事ですが。）

東洋医学に少しでも関心のある方は是非一度いらしてください。部員一同歓迎いたします。



春の東百会 in 三重

知恩のこたば

医学科 6 年

Le Minh Tuyen

私は私費留学生として平成15年に本学に入学して、最後の学年が過ぎようとしています。入学した当時はベトナムからあるいは世界から自ら選んで日本へ留学してくる他の留学生は何百人か、それ以上もいたはずですが。彼らはきっとそれぞれの目的をもって日本へやってきたわけですね。私も世界にはない何かを日本で学ぼうと思っていました。それは、日本が世界に誇る「世界一長寿国」を担っている医学・医療を勉強することでした。これは、私の小さな誇りでもあります。

私はベトナムの南部にある海沿いの小さな町で生まれ、その町の手風と常夏の日差しとともに育ちました。中学校からその町を離れ南部の中心都市であるホーチミン市へ一人で寮制の中学校に、いわば“ドメスティック留学”の形で移動しました。当時、私は勉強に対して熱心だったかは覚えていませんが、とにかく周りの学生たちは常に勉強という環境だったので、多少は影響を受けたかと思っています。

振り返れば、日本への留学の動機付けの一つとして、第2次世界大戦後、著しく復興し、逸早く近代化に成功した日本の魅力に魅かれた想いがありました。また、Viet-Duc（ベトナムちゃん）のことがベトナムでは広く知られており、それがきっかけとなり、私の日本への関心の始まりとなりました。そして、最初から不思議にも静岡県とはご縁があったかと思っています。静岡県では、磐田市で約1年、静岡市で約1年半、そして現在浜松市で6年間を過ごしてきました。磐田市は「アジアの掛け橋」でホームステイしていた所です。学校がない日にはサッカーJubiloを見にいたり、神社や茶畑などを訪れたりしました。そして、何よりも私の歴史の1ページに大きく描いたのは磐田西高校で私の恩人である二村先生と

の出会いでした。二村先生と接して本当に人情、誠実さ、人の心の優しさを知る気持ちは今でも覚えています。私にとっての日本のオヤジです。磐田市での1年間は生まれて初めての色々なカルチャーショックと言葉の壁との衝突で終わりました。帰国後、高校を卒業して、やはり5時間航空で海の向こうにある日本が恋しく懐かしくなりました。私は二村先生が保証人になってくれたお陰で再度日本へ戻る事が出来、今に至るきっかけとなったのです。

浜松に来てからもやはり気候の違いを感じました。日本もベトナムも国土の形は南北に細長いという共通の特徴がありますが、乾季と雨季が交代してベトナム全土を見守るのに対して日本では四季がはっきり分かれています。ベトナムの乾季は日本の冬～春になり、雨季は夏～秋になります。今までなかった冬はあるが、暑い夏の半分は安らかな夕と万華鏡の紅葉にかわります。そのためか、「日本は寒いよ」という亜熱帯住民であった私がかもっていた先入観はいつの間に消え去ってしまうのも不思議ではありません。しかし、幸か不幸か、浜松では「遠州のからっ風」があるおかげで、“恐れ”の冬でも雪があまりふらずにすみません。が、やはり寒いです。

日本にきた経験があるといえど、大学という新しい環境では戸惑いが少なくありませんでした。入学早々の心細さは恐らく殆どの学生にはあると思いますが、クラスの中のたった一人の留学生という存在感はその心細さの、いわゆる“増悪因子”でもあったかと思っています。それだけではなく、クラブ活動での独特な先輩後輩のつながりなども私にとっては新鮮な概念でした。それを知らなかった私は何度か先輩や同級にご迷惑をかけたことがありました。しかし、私の勝手な心細さを募らせることなく、対等に付き合い、支えてくれた友人や先輩方との出会いがあったからこそ、色々な困難を乗り越えることができたと思っています。彼らには感謝し、これからも築いてきたその絆を大切にしていきたいと思っています。

また、多くの先生方、後援会の皆様からのご応援をなくしては、本学での勉強においてこれまでの長い道のりを無事に歩けることができなかった

のです。本当に心から感謝し、この機会をかりてその意を表したいです。近い将来、私を育ててくださったお礼に、目に見える形で恩返しをし、これからも努力し続けたいと思っています。



私の留学生活

医学系研究科博士課程 4 年

王 博

私は中国から来ました王博と申します。2000年中国医科大学の日本語臨床医学部を卒業して、その後、中国医科大学の医学分子生物学に助手として4年間勤めました。2004年10月6日、浜松医科大学に留学することになり、人生で初めて家族と別れて、しかも外国で一人生活を始めました。

おかげさまで、文部科学省の国費外国人留学生（研究留学生）奨学金をいただいて、生活の面には苦労がありませんが、最初はやはり外国での生活に対して心細さを感じました。一人だからちょっと寂しい思いもしました。でも周りの方はみんな優しく親切で、生活の面でも研究の面でもいろいろ助けていただきました。

私は生化学第二講座の三浦教授の下で研究しています。先生に暖かく指導していただき、いろいろ勉強になりました。研究自体は苦労が多いですが、自分の興味を持っているテーマに会ったら、ひたすら研究に冒頭でき、少しでも成果を挙げれば、すごく興奮して達成感を感じられます。

今は、RBについて研究しています。Rb癌抑制蛋白は細胞増殖、細胞死、細胞分化を制御している核蛋白であるRb蛋白のリン酸化により、Rb蛋白が細胞分裂に中心的な役割を果たす転写因子E2Fを活性状態あるいは不活性状態に制御して細胞周期を調節しています。私たちは以前、野生型Rb蛋白を肝細胞に過剰発現させたRbトランスジェニックマウスを作製し、そのマウスは肝化学発癌剤による肝細胞癌発生を抑制しました。今回、Rb蛋白のリン酸化部位のセリン/スレオニンアラニンに変えた変異Rb蛋白をコードするcDNAを肝細胞転写因子HNF-1プロモーター/エンハンサー支配下に発現するトランスジェンでトランスジェニックマウス（Tg）を作製しました。Tgはメンデル法則どおり生まれ、肝組織構築も正常でした。生後6ヶ月までは、野生型と差異を認めなかったが、生後6-8ヶ月でTgの肝細胞は野生型に比し肝細胞増殖性高値を維持し、生後11ヶ

月では50%のTgに肝臓腫瘍を発生しました。同年齢の野生型マウスは肝臓腫瘍の発生率は0%でした。腫瘍部分は細胞多様性とアポトーシスの亢進を示しました。肝細胞における常時活性型Rb蛋白の持続的発現は肝臓腫瘍を誘導するという今回の結果は、Rb蛋白は特殊な状況下では腫瘍促進作用をもつということを意味しています。これについて、未知なことがまだまだいっぱいありますので、すごく興味深く、研究を続けて行きたいと思っています。

今年で日本に来て4年目になりました。生活にも慣れて、浜松のことも大好きになりました。浜松は空気が綺麗で、四季がはっきりして、気候的にも住み心地がいいところです。日本人の友達もでき、たまに海へ釣りに誘われて、すごく楽しいです。

去年、息子が生まれました。大変なことはもちろんたくさんありますが、息子の成長を見守りながら、父親として、人生最高の喜びを味わいました。今、家に帰ったら、一才の息子と一緒に遊ぶことは一番のリラックスタイムになります。ただ、保育園は大変込んでいるため、なかなか入れないですが・・・（苦笑い）。

来年3月に大学院を修了します。しばらくは日

本にいて、ポスドクか、研究所に入って、自分の好きな分野で研究を続けるつもりです。将来は、肝臓病の研究領域で、患者さんに少しでも役立つことができればいいなと思います。これを目標として、一生懸命研究を続けて、全力を尽くしたいと思います。

浜松医大での留学生生活はあと半年ぐらいで終わりますが、学会、留学生見学旅行、中日友好交流の催し、静岡大学の留学生とのスポーツ大会など、ここでの思い出はいっぱいあり、きっと一生忘れないと思います。留学生生活をこれほど楽しくしてくれたのは、やはり周りの方々の暖かい支援のおかげです。どうやって言葉に表現すればいいかわからないですが、感謝の気持ちでいっぱいです。最後に、大学の先生、友達、家族も含めて、皆様に対して、お礼の一言を申し上げさせていただきます。本当にありがとうございます。



力持ちの息子



留学生見学旅行（奈良）

平成20年度入学者選抜状況

平成20年4月1日現在

年度	学科名	区 分 〔募集人員〕	志願者数	受験者数	合格者数	入 学 辞退者数	追 加 合格者数	入学者数
平成20年	医 学 科	前期日程 〔55〕	423 (116)	369 (104)	56 (10)	1 (1)	0 (0)	55 (9)
		後期日程 〔10〕	175 (70)	102 (41)	10 (5)	2 (1)	2 (1)	10 (5)
		推薦入学 〔30〕	65 (25)	65 (25)	28 (9)	0 (0)	0 (0)	28 (9)
		帰国子女 〔若干名〕	16 (8)	8 (5)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	2 (2)
		合 計 〔95〕	679 (219)	544 (175)	96 (26)	3 (2)	2 (1)	95 (25)
		私費外国人 〔若干名〕	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	看 護 学 科	前期日程 〔35〕	43 (41)	42 (40)	35 (34)	4 (4)	0 (0)	31 (30)
		推薦入学 〔25〕	64 (58)	63 (57)	28 (27)	0 (0)	0 (0)	28 (27)
		帰国子女 〔若干名〕	4 (4)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)
		社会人 〔若干名〕	2 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
		合 計 〔60〕	113 (105)	111 (103)	64 (62)	4 (4)	0 (0)	60 (58)
		3年次編入学 〔10〕	34 (32)	24 (22)	10 (10)	4 (4)	4 (3)	10 (9)
	助産学専攻科 〔10〕		25 (25)	22 (22)	10 (10)	1 (1)	1 (1)	10 (10)

() 書きは、内数で女子を示す。

平成 20 年度入学者選抜卒業年別内訳

平成20年 4 月 1 日現在

学科	卒業年月	平成 20年3月	平成 19年3月	平成 18年3月	平成 17年以前	大学検定	帰国子女	合計	私費外国人
医 学 科	志願者	388(140)	144(35)	46(9)	78(25)	7(2)	16(8)	679(219)	1(0)
		57.1%	21.2%	6.8%	11.5%	1.0%	2.4%	100.0%	
	入学者	50(15)	30(6)	8(2)	3(0)	2(0)	2(2)	95(25)	0(0)
		52.6%	31.6%	8.4%	3.2%	2.1%	2.1%	100.0%	
看 護 学 科	志願者	100(94)	5(4)	0(0)	4(3)	0(0)	4(4)	113(105)	
		88.5%	4.4%	0.0%	3.5%	0.0%	3.5%	100.0%	
	入学者	57(55)	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)	60(58)	
		95.0%	1.7%	0.0%	1.7%	0.0%	1.7%	100.0%	
合 計	志願者	488(234)	149(39)	46(9)	82(28)	7(2)	20(12)	792(324)	1(0)
		61.6%	18.8%	5.8%	10.4%	0.9%	2.5%	100.0%	
	入学者	107(70)	31(7)	8(2)	4(1)	2(0)	3(3)	155(83)	0(0)
		69.0%	20.0%	5.2%	2.6%	1.3%	1.9%	100.0%	

備考 1. () 書きは、内数で女子を示す。

2. 編入学を除く。

平成20年度入学者選抜出身高等学校等所在地別入学者数内訳

平成20年度入学者選抜（総計）

学 科 名	医 学 科	看 護 学 科	計
都 道 府 県	入 学 者	入 学 者	
北海道			0 (0)
青森			0 (0)
岩手			0 (0)
宮城			0 (0)
秋田			0 (0)
山形	1		1 (0)
福島	1		1 (0)
茨城	2 (1)		2 (1)
栃木	1	1 (1)	2 (1)
群馬			0 (0)
埼玉	1		1 (0)
千葉	1		1 (0)
東京都	12 (6)		12 (6)
神奈川県	6 (1)		6 (1)
新潟			0 (0)
富山			0 (0)
石川		1 (1)	1 (1)
福井			0 (0)
山梨	2		2 (0)
長野		3 (3)	3 (3)
岐阜	1		1 (0)
静岡県	49 (11)	39 (37)	88 (48)
愛知県	11 (4)	10 (10)	21 (14)
三重			0 (0)
滋賀			0 (0)
京都	1		1 (0)
大阪	1		1 (0)
兵庫県			0 (0)
奈良			0 (0)
和歌山			0 (0)
鳥取			0 (0)
島根			0 (0)
岡山	1	1 (1)	2 (1)
広島			0 (0)
山口		2 (2)	2 (2)
徳島			0 (0)
香川			0 (0)
愛媛			0 (0)
高知			0 (0)
福岡			0 (0)
佐賀			0 (0)
長崎		1 (1)	1 (1)
熊本			0 (0)
大分			0 (0)
宮崎		1 (1)	1 (1)
鹿児島			0 (0)
沖縄			0 (0)
大学検定	2		2 (0)
外国			0 (0)
帰国子女	2 (2)	1 (1)	3 (3)
私費留学生			0 (0)
合 計	95 (25)	60 (58)	155 (83)

備考 1. () 書きは、内数で女子を示す。

2. 編入学を除く。

第102回医師国家試験大学別合格状況

順位	学 校 名	総 数		
		受験者数	合格者数	合格率
1位	自治医科大学	106	105	99.1%
2位	順天堂大学医学部	93	92	98.9%
3位	山形大学医学部	102	100	98.0%
4位	産業医科大学	89	87	97.8%
5位	筑波大学医学専門学群	116	113	97.4%
6位	和歌山県立医科大学	66	64	97.0%
7位	香川大学医学部	97	94	96.9%
8位	横浜市立大学医学部	61	59	96.7%
9位	三重大学医学部	104	100	96.2%
10位	愛媛大学医学部	102	98	96.1%
11位	浜松医科大学	118	113	95.8%
12位	慶應義塾大学医学部	94	90	95.7%
13位	弘前大学医学部	111	106	95.5%
14位	福島県立医科大学	85	81	95.3%
15位	京都府立医科大学	105	100	95.2%
16位	防衛医科大学校	59	56	94.9%
17位	富山大学医学部	98	93	94.9%
18位	東京医科歯科大学医学部	93	88	94.6%
19位	神戸大学医学部	111	105	94.6%
20位	札幌医科大学	109	103	94.5%
21位	東京慈恵会医科大学	109	103	94.5%
22位	鳥取大学医学部	89	84	94.4%
23位	岐阜大学医学部	88	83	94.3%
24位	滋賀医科大学	103	97	94.2%
25位	九州大学医学部	115	108	93.9%
26位	大分大学医学部	95	89	93.7%
27位	千葉大学医学部	110	103	93.6%
28位	昭和大学医学部	120	112	93.3%
29位	名古屋大学医学部	105	98	93.3%
30位	埼玉医科大学	115	107	93.0%
31位	愛知医科大学	113	105	92.9%
32位	奈良県立医科大学	98	91	92.9%
33位	佐賀大学医学部	98	91	92.9%
34位	北海道大学医学部	123	114	92.7%
35位	京都大学医学部	113	104	92.0%
36位	岡山大学医学部	100	92	92.0%
37位	大阪市立大学医学部	86	79	91.9%
38位	宮崎大学医学部	111	102	91.9%
39位	聖マリアンナ医科大学	121	111	91.7%
40位	近畿大学医学部	117	107	91.5%

順位	学 校 名	総 数		
		受験者数	合格者数	合格率
41位	名古屋市立大学医学部	80	73	91.3%
42位	久留米大学医学部	126	115	91.3%
43位	日本大学医学部	111	101	91.0%
44位	山梨大学医学部	111	101	91.0%
45位	群馬大学医学部	110	100	90.9%
46位	東京大学医学部	97	88	90.7%
47位	金沢大学医学部	112	101	90.2%
48位	熊本大学医学部	112	101	90.2%
49位	岩手医科大学	91	82	90.1%
50位	秋田大学医学部	111	100	90.1%
51位	杏林大学医学部	99	89	89.9%
52位	大阪大学医学部	109	98	89.9%
53位	関西医科大学	108	97	89.8%
54位	鹿児島大学医学部	117	105	89.7%
55位	日本医科大学	106	95	89.6%
56位	北里大学医学部	115	103	89.6%
57位	信州大学医学部	106	95	89.6%
58位	島根大学医学部	96	86	89.6%
59位	広島大学医学部	105	94	89.5%
60位	川崎医科大学	122	109	89.3%
61位	旭川医科大学	104	92	88.5%
62位	徳島大学医学部	104	92	88.5%
63位	獨協医科大学	121	107	88.4%
64位	新潟大学医学部	100	88	88.0%
65位	東京女子医科大学	113	99	87.6%
66位	長崎大学医学部	95	83	87.4%
67位	福岡大学医学部	118	103	87.3%
68位	山口大学医学部	106	92	86.8%
69位	大阪医科大学	120	104	86.7%
70位	福井大学医学部	119	102	85.7%
71位	高知大学医学部	101	86	85.1%
72位	東北大学医学部	104	88	84.6%
73位	東邦大学医学部	110	93	84.5%
74位	琉球大学医学部	129	109	84.5%
75位	藤田保健衛生大学医学部	132	111	84.1%
76位	兵庫医科大学	105	88	83.8%
77位	東京医科大学	127	106	83.5%
78位	金沢医科大学	121	101	83.5%
79位	東海大学医学部	109	88	80.7%
80位	帝京大学医学部	134	105	78.4%
	認定及び予備試験	71	36	50.7%
	総 合 計	8,535	7,733	90.6%

浜松医科大学医学部医学科卒業者の医師国家試験合格状況（年次別）

年	試 験	卒業者数	受験者数	合格者数	不合格者	合格率	全国順位	全国平均 合格率(%)
昭和60年	第79回	91(18)	93	92	1	98.9	3位	85.6
昭和61年	第80回	87(23)	87	87	0	100.0	1位	83.6
昭和62年	第81回	104(19)	104	101	3	97.1	5位	86.2
昭和63年	第82回	94(19)	97	90	7	92.8	11位	81.2
平成元年	第83回	100(33)	106	102	4	96.2	4位	88.0
平成 2 年	第84回	100(35)	103	98	5	95.1	6位	82.9
平成 3 年	第85回	96(30)	102	95	7	93.1	7位	84.1
平成 4 年	第86回	101(19)	108	98	10	90.7	12位	84.0
平成 5 年	第87回	105(30)	115	111	4	96.5	11位	90.0
平成 6 年	第88回	118(26)	122	110	12	90.2	29位	86.2
平成 7 年	第89回	100(22)	112	102	10	91.1	24位	86.0
平成 8 年	第90回	93(25)	103	96	7	93.2	28位	89.3
平成 9 年	第91回	101(23)	108	102	6	94.4	12位	88.1
平成10年	第92回	96(31)	102	98	4	96.1	11位	89.6
平成11年	第93回	102(45)	105	102	3	97.1	1位	84.1
平成12年	第94回	92(34)	95	80	15	84.2	23位	79.1
平成13年	第95回	92(36)	106	100	6	94.3	20位	90.4
平成14年	第96回	108(24)	113	108	5	95.6	19位	90.4
平成15年	第97回	107(33)	112	102	10	91.1	39位	90.3
平成16年	第98回	93(44)	103	96	7	93.2	22位	88.4
平成17年	第99回	95(38)	102	94	8	92.2	29位	89.1
平成18年	第100回	116(40)	125	112	13	89.6	50位	90.0
平成19年	第101回	86(27)	99	92	7	92.9	20位	87.9
平成20年	第102回	112(31)	118	113	5	95.8	11位	90.6

カッコ内は女子で内数

浜松医科大学医学部看護学科卒業者の保健師・看護師の国家試験合格状況（年次別）

保健師国家試験

年	回数	卒業者数	新 卒			既 卒			全国平均 合格率(%)
			受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	
平成16年	第90回	66(10)	66(10)	65(10)	98.5(100)	2	2	100.0	98.5
平成17年	第91回	70(10)	70(10)	67(10)	95.7(100)	1	0	0	94.4
平成18年	第92回	72(12)	71(11)	67(11)	94.4(100)	3	2	66.7	93.2
平成19年	第93回	71(11)	70(11)	70(11)	100.0(100)	4	4	100.0	100.0
平成20年	第94回	70(10)	70(10)	69(10)	98.6(100)	0	-	-	98.6

() 書きは3年次編入

看護師国家試験

年	回数	卒業者数	新 卒			既 卒			全国平均 合格率(%)
			受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	
平成16年	第93回	66(10)	56	55	98.2	1	0	0	96.5
平成17年	第94回	70(10)	60	59	98.3	2	1	50	96.8
平成18年	第95回	72(12)	60	60	100.0	2	0	0	96.8
平成19年	第96回	71(11)	58	57	98.3	2	2	100	98.3
平成20年	第97回	70(10)	60	59	98.3	1	1	100	98.4

() 書きは3年次編入

助産師国家試験

年	回数	卒業者数	新 卒			既 卒			全国平均 合格率(%)
			受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	
平成16年	第87回	66(10)	6	6	100	0	-	-	96.2
平成17年	第88回	70(10)	6	6	100	0	-	-	99.7
平成18年	第89回	72(12)	6	6	100	0	-	-	98.1
平成19年	第90回	71(11)	6	6	100	0	-	-	94.3
平成20年	第91回	70(10)	4	4	100	0	-	-	98.1

() 書きは3年次編入

平成20年3月浜松医科大学医学部医学科卒業者の就職状況

就 職 先 等	人 数	内 訳
大学附属病院	61	浜松医科大学附属病院 36
		横浜市立大学医学部附属病院 3
		横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター 1
		東京医科歯科大学医学部附属病院 7
		東京大学医学部附属病院 2
		岐阜大学医学部附属病院 2
		自治医科大学医学部附属さいたま医療センター 1
		筑波大学附属病院 1
		千葉大学医学部附属病院 1
		滋賀医科大学医学部附属病院 1
		大阪市立大学附属病院 1
		北里大学病院 1
		順天堂大学病院 1
		順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院 2
		藤田保健衛生大学病院 1
公 立 病 院	24	磐田市立総合病院 5
		藤枝市立総合病院 1
		静岡県立総合病院 3
		島田市民病院 1
		国立精神神経センター国府台病院 1
		立川災害医療センター 1
		名古屋医療センター 2
		相模原病院 1
		名古屋市立東市民病院 1
		豊橋市民病院 1
		県立宮崎病院 1
		沖縄県立中部病院 1
		小牧市民病院 1
		蒲郡市民病院 1
		大垣市民病院 1
		平塚市民病院 1
		静岡市立清水病院 1
そ の 他 病 院		静岡赤十字病院 1
		聖隷浜松病院 2
		聖隷三方原病院 3
		板橋中央総合病院 2
		東京厚生年金病院 1
		安城更生病院 1
		東京北社会保険病院 1

就 職 先 等	人 数	内 訳	
そ の 他 病 院	24	虎の門病院	1
		聖路加国際病院	1
		湘南鎌倉総合病院	1
		横浜市南部病院	1
		国保旭中央病院	1
		千葉労災病院	1
		津田沼中央総合病院	1
		沖縄協同病院	1
		総合大雄会病院	1
		みなと医療生活協同組合協立総合病院	1
		遠州病院	2
		川口工業総合病院	1
そ の 他	3		3
計	112		112

平成 20 年 3 月浜松医科大学医学部看護学科卒業者の就職状況

就 職 先 等	人 数	内 訳	
大学附属病院	35	浜松医科大学医学部附属病院（助産師 2）	22
		横浜市立大学附属病院（保健師 1）	3
		横浜市立大学市民総合医療センター	1
		東京医科歯科大学医学部附属病院	2
		名古屋大学医学部附属病院	2
		名古屋市立大学医学部附属病院	1
		藤田保健衛生大学病院	1
		藤田保健衛生大学坂文種報_會病院	1
		福岡大学病院	1
		順天堂大学医学部附属順天堂医院	1
国 公 立 病 院	9	静岡県立総合病院	4
		島田市民病院	2
		磐田市立総合病院	1
		飯田市立病院	1
		国立病院機構名古屋医療センター	1
そ の 他 病 院	13	聖隷浜松病院（助産師 1 保健師 1）	6
		聖隷三方原病院	1
		日本赤十字医療センター（助産師）	1
		JA静岡県厚生連遠州病院（保健師 2）	2
		JA鹿児島県連厚生連病院	1

就 職 先 等	人 数	内 訳	
そ の 他 病 院		虎の門病院	1
		(財)神奈川県警友会けいゆう病院	1
保 健 所 等	5	浜松市役所 (保健師)	1
		豊田市役所 (保健師)	1
		東芝ライテック株式会社 (保健師)	1
		キャノン株式会社 (保健師)	1
		株式会社五味八珍	1
進 学	2	愛知県立看護大学、金沢大学	2
そ の 他	6	未定	6
計	70		70

平成 20 年度への進級状況

1. 医学部医学科 (単位：人)

区 分	2 年次生→3 年次生		4 年次生→5 年次生		6 年次生→卒業	
在籍者	101		105		113	
進級者・卒業者		97		102		112
留年者	4		3		1	

2. 医学部看護学科 (単位：人)

区 分	2 年次生→3 年次生	4 年次生→卒業
在籍者	60	70
進級者・卒業者	59	70
留年者	1	0

浜松医大での33年9ヶ月を振り返って

前理事（教育・国際交流担当）

市 山 新

1974年6月7日の開校と同時に本学に赴任した私は、本年3月に最終的に退職するまで33年9ヶ月間も本学に勤務させていただいた。内訳は、生化学第一の教授として25年10ヶ月（1974.6～2000.3）、教育等担当副学長として3年11ヶ月（2000.5～2004.3）、教育・国際交流担当理事として4年（2004.4～2008.3）である。本当に長い間本学のお世話になった。本学と共に歩んできたこの約34年を本学に対する感謝をこめて振り返ってみたいと思う。

（1） 本学創設の頃

1973年度の国会での予算審議が長引いたために本学の開校は予定より2ヶ月あまり遅れた。この遅れのため時期はずれの6月下旬に行うことになった第1回入試は倍率が40倍内外の大変な入試になり、着任早々きりきり舞させられたことは忘れられない。当時、現半田山キャンパスの敷地はまだマムシやキツネの住む単なる丘であり、本学は布橋にあった県立女子短大の古い木造の校舎を借りて活動を開始した。私達はこの校舎の2階で吉利学長、高橋副学長を中心に会議に明け暮れし、超難関の入試を突破して入学した1期生の授業は中庭に建てたプレハブの校舎で夏休みを返上して行った。勿論冷房などはなかった。あまり暑いので、確か物理学の神田教授の発案で、プレハブ校舎の屋根に穴開き水道管を設置し、授業時間中水を降らせたところ、新聞で大きく報道されるという一幕もあった。教員と事務局と学生との関係が親密で、皆が前向きに頑張った素晴らしい時期であった。しかし、われわれ教員にとってはこのような条件下でどのように研究を続行するかが大問題であった。私の場合、ありがたいことに前任



校の東京大学の地下の研究室を使わせていただいたので、当時多摩市にあった自宅のほかに、浜松と東大の赤門の前に下宿を作り、毎週のように東京と浜松を往復した。交通費と下宿代がかさんだ時期でもあった。

（2） 生化学第一における研究

以上のような研究環境から出発したので、only oneの研究が大切と強く思うようになった。散々考えた末肝臓のSPTという酵素を教室の主な研究テーマの一つに選んだ。この酵素は動物の食習性により細胞内局在小器官（具体的にはミトコンドリアとペルオキシソーム）が異なるという特徴を持つ。したがって、進化の過程でこのような変わった細胞内局在をもたらした生理的必然性は何か、個々の小器官への標的シグナルは何か、食習性によるその付け替えの機構は何か等が主たる問題点であったが、私の在任中にほぼ全容を解明できたと考えている。創設期から苦楽を共にした芳賀達也助教授（東京大学医学部教授を経て現在学習院大学教授）と長谷川宏幸助手（現在帝京科学大学教授）はそれぞれムスカリン性アセチルコリン受容体の単離・同定、末梢型トリプトファン水酸化酵素の発見という立派な成果を挙げてくれた。

生化学第一での教育、研究と関連して、生化学第二等と協力して行ったランチセミナーに言及したい。このセミナーの目的は質の高い研究との日常的接触であり、担当者が自らの興味に基づいて選んだ論文の研究の背景、目的、思考過程や実験

データとその解釈等を著者に代わって紹介し、食事を摂りながら聞いている他のメンバーがこれに対して批判的に質問するという形式で行った。週2～3回のペースで四半世紀も休みなく続けたので、スタッフにも、また若手研究者の育成という観点からも充分有益であったと思っている。

(3) 副学長、理事の時代

途中で国立大学法人化という大きな出来事があったため、思いがけず副学長・理事職を8年間も勤めさせていただいた。大学評価には苦勞させられたし、何かとストレスの多い立場だったが、寺尾学長やその他のスタッフとの良好な関係の下にこの間一貫して気持ちよく働けたことはありがたかった。教育等担当としての私の最大の任務は言うまでもなくより良い教育の構築であった。そして、小児科の本郷輝明助教授（現在磐田市立総合病院理事）をはじめ多くの有志の先生方と協力して、医学科の専門教育に部分的にPBLチュートリアル教育を導入するに至った。最近、教育担当の教員と研究を主たる職務とする教員を分けようという議論がなされたり、どう見ても大学には似つかわしくないスプーン・フィーディング式教育を善とする主張がなされたりしている。しかし私は、大学における研究と教育は分離できるものではなく、学生に活気があり、教員の目に学生が常に見えていることが教育のみならず研究にとっても非常に大切と思っている。医学科のPBL、基礎配属、ポリクリ、看護学科の各種実習やその他の機会を通じて本学教員と学生の相互理解が深まり、これにより学生のみならず教員も成長し、多くの本学卒業生が本学に残って研究、教育、診療の力になることで、本学が更に大きく発展することを切に祈っている。



国連での仕事

医学科19期生（平成10年3月卒業）

難波江 功 二

学生時代この「ニュースレター」を毎号楽しく拝見しておりましたが、その中でも、4年生の時に見たPLOアラファト議長と握手をしている写真とともに掲載されたWHOパレスチナ事務所長（当時）の6期生神馬征峰先生（現東京大学医学部国際地域保健学教授）の卒業生便りには、このような形で国際的に活躍されている浜医卒業生がいるのだ、ととても衝撃を覚えたことを鮮明に記憶しております。

そんな私も卒後10年が過ぎ、臨床研修、厚生労働省本省勤務等を経て、現在は2年半前よりパンコクの国連インフルエンザ対策調整事務局で地域調整官として勤務しております。

タイには深い縁を感じています。大学2年生の時、同級生と初めてバックパック旅行をしたのもタイでしたし（その時はよく騙されました。）、公衆衛生実習もタイをフィールドとして、同級生8人で訪問しました。結局その後15年間毎年タイを訪問することとなり、タイ人と結婚するまでに至りました。今は老後の永住地とお墓をタイのどこにしようか考えている始末です。

国連での勤務を通じて感じることで、まず、国連はあくまでも政府間組織であるため、業務の主たるカウンターパートは加盟国政府の役人となり、役人が何を求め、どのような手法、サイクルで業務を行っているのかということを承知していないと、専門技術を持っていても、なかなかいい仕事はできない、ということが挙げられます。この点、長年厚労省の役人として勤務し、知らず知らずの間に体に染み付いた発想、手法が、（自分がいい仕事をしている、していないは別に）非常に役に立ち、自分のcompetitive edgeとして有利に働いていると感じています。

また、百戦錬磨の国連職員を相手に、未だジュニアでノンネイティブの私が調整業務を行うことは容易なことではありませんが、一方で、日本人独特のきめ細かさ、誠実さが国連にそれなりの付

加価値を与えている、と確信するに至っています。特に国連では一年程度の短期契約職員が多く、皆短い期間で成果を挙げることに必死であるため、過去の実績を十分に踏襲せず、また他の活動を十分に把握せず見切り発車することが散見されるのですが、その点、日本人は組織で働くことに慣れているのか、業務の一貫性に重きを置き、全体の中での自分の位置づけをしっかりと確認しながら仕事を進めることが得意という点で、有利な立場にいとを考えています。

そして、学生時代の留年し持て余した時間を使って世界各地を歩き回った経験や、多くの先生方が同じ町に住まれ、放課後も教室や居酒屋で嫌な顔ひとつせず長時間お話につきあって頂いた贅沢な環境が、自分の思考視野を深化拡大させることにつながり、世界の人を相手にする現在の仕事に本当に役立っていると実感しています。

神馬先生が卒業生便りで公衆衛生の道に進む日本人が少ないことを嘆かれておられましたが、現在の国連の状況を見る限りにおいても、変わっていないと思います。日本のODAが減少し、またソフトな援助がより必要とされる中、日本は今後、より人を通じての国際協力に重きを置くでしょう。医療崩壊が一層人材が求められる分野になるでしょう。医療崩壊が叫ばれる現在、やはり多くの卒業生には臨床の第一線で活躍してほしいと願う一方、同級生のうち一人か二人でも公衆衛生行政の道に進まれる方が現れることも願ってやみません。もしご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ご連絡頂けますと幸いです。

(k-nabae@umin.ac.jp)



タクシン元タイ首相と

寄

稿

看護学科同窓会が設立しました

看護学科同窓会長 看護学科1期生

高 林 智 子

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

平成20年5月に、浜松医科大学看護学科同窓会が誕生しました。

今までは、浜松医科大学の同窓会に看護学科の同窓生が会員として加入していましたが、実情に見合った同窓会運営を目指し、独立することとなりました。看護学科同窓会設立につきましては、諸先生方の大きなお力添えをいただきまして、無事に独立することができ、この場で厚く御礼を申し上げます。

平成19年度から、同窓会設置に向けての準備委員会を月1回程度、開催してきました。同窓会の意義や在り方について話し合い、運営方法について検討してきました。準備に携わってくださった先生方、同窓生の皆さん、同窓会事務局の方々、ボランティアで準備に携わってくださり、ありがとうございました。

同窓会の価値って何でしょうか？

現代は、インターネット、携帯電話の普及により、情報伝達・収集手段は手軽で身近なものになっています。また、個人情報保護の問題もあります。このような時代に、あえて紙媒体の名簿を作成したり、同じ場所に集って会議をしたり、会誌を作成して情報を伝えたり…と、つながりの場を同窓会が作る必要があるのでしょうか？また、看護学科の卒業生は、看護師として働いている人もいれば、子育てをしている人もいます。働いている場所も全国各地、病院やクリニック、保健所などの公的機関など、さまざまです。ネットワークを作る意味は何でしょうか？

必要な時に必要なつながりがあればいいと思います。でも、必要な時に、「つながり」をゼロから創ることは、大変な労力が要ります。そのような時に、同窓会が有効に利用できる「つながり」

であればと思います。

同窓会という箱はできましたが、中身はまだ空っぽです。これから、どんなものを入れていくのか、それは、同窓生が創っていくのです。おいしいお菓子の詰め合わせになるかもしれないし、キラキラした宝石箱になるかもしれないし、お正月にいただくお重箱になるかもしれないし…。箱そのものが変わるかもしれません。

看護学科1期生は卒業して、10年目を迎えます。思い返せば、入学した頃は、医学科の空いている教室を間借りしていた状況でした。実習服のデザインは、皆で決めました。卒業アルバムはどうする？国試の模擬テストはどうする？といろいろなことが初めてでした。皆で作っていく看護学科だったと、楽しかった思い出があります。

同窓会は、産声を上げたばかりです。卒業して10年目に同窓会1年目を迎えることに、不思議な縁も感じます。同窓会のアイデンティも皆さんで作っていくものだと思います。誰のための同窓会なのかということを、是非考えていただいて、ご意見を寄せていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

末筆になりましたが、皆様のますますのご活躍をお祈りいたします。

さ る ん

樹を楽しむ

生化学第二講座助教

佐藤 英二

巨木には何かあると感じる。ヒトのことなんかにかまっていられない何かがある。千年も生きていればなにかある。以前は百年前は遠い昔に感じた。だって自分は生まれていない。知らない。このごろは五百年、千年前はチョット前と感じるのはどうしてか、おむかえも近いのか。巨木はその間生きている。すごいと思うのは年食ったからでしょうか。年をとると新緑とか紅葉とかが愛おしく好きになるのはどうしてか。新緑は生、紅葉は死。「見るべきものは見つ」の心境にならない訳でもないが、なんであれ「見ること」は大好きだ。「冥土の土産」に巨木を見に行きたいと思っている。この頃見た6カ所の巨木へのコメントです。

まずなんと言っても『春埜杉（はるのすぎ）』。「遠州地方にいたら死ぬまでには、この木だけは見ておくべき」という樹木医塚本こなみ氏の講演を聞きました。浜松市天竜区春野町にある春埜山大光寺の大杉です。やはりスゴかったです。屋久杉は見えてませんが、見に行けない人はこの大杉でも十分だという気にさせられます。樹齢は推定1,300年位だそうです。春野町の地元の人はこの杉のことを小便杉と呼んでいた。意外と地元の人は大抵無関心です。浜松には見るべきものはなにもないと感じる方、浜松医大から車で1時間半のところに巨木大杉があります。洗心の思いです。

それから、春野町には『将軍杉』があります。端正な大杉です。出掛ける時はこの2カ所の杉をセットで見て回るといいでしょう。

忘れてはならないのが島田市千葉山智満寺の『十本杉』です。国道1号線のバイパスから降りて約30分で智満寺に着きます。そこのお堂もいい



春埜杉

んです。そこから歩いて約25分で頂上に着きます。十本の内2本はありませんが、その遺骸があります。朽ち果てた遺木です。あとの8本は健在です。映画「ロード オブ ザ リング」に出てきた木々を思い出しました。

楠木で巨木はなんといっても『磐田駅前』の楠木です。戦後、都市開発で切ろうとした情けない人達がいたようです。いつの世も人間様は地球荒らしの張本人か。磐田駅に来たらこの楠木を拜んでくださいね。

場所はとんで大分県は湯布院。そこにも巨木大杉がありました。『大杵社（おおごうしゃ）の大杉』です。春埜杉に匹敵する杉でした。以前、不心得者がこの大杉の空洞3畳ほどでたき火をしてボヤになって、樹上から煙が出た。それでもこの木は生きていた。却って元気になった。大分県で一番の巨木だとか。案外湯布院に行ってもこの杉は見えていない人も多いらしい。

『高野山の杉』も巨木ですね。墓を建てた時に一緒に植えた杉が成長して現在の大きさの杉になっていると聞きました。織田信長、豊臣秀吉などの墓もあります。墓の間から生えている四、五百年杉がたくさんです。墓と杉の奇妙なバランス、そのおどろおどろしさも不思議です。

以上6カ所、機会があったら見に行ってくださいね。



将軍杉

星空に魅せられて

技術部技術専門職員

鈴木孝征

私と星空との出会いをお話するには随分と過去に時間を巻き戻ししなければなりません。いたずら盛りな中学2年の夏のころ．．．林間学校に行くことになり大騒ぎの楽しい日となったのです。途中の記憶はあまりはっきりしていません。貸し切りバスに乗って行ったが町からはそんなに遠く離れた山間ではなかったと思います。綺麗な清流が流れる広い所でした。今、思うと当時は自宅も田舎でしたがここもかなり僻地な所なのでしょう。此と云って大きな建物などは無い。到着すると当然まずは家造り、先生から「各班ごとにテントを張れ」の指示、蜂の巣をつついたような大騒動である。夕ご飯は当然子供の大好物のカレーライスだ。カレー作りはやはり女の子の仕事、火起こしとご飯作りは男の子の仕事だ。これまた蜂の巣をつついたような大騒動である。当時の川の水はとっても綺麗だからその水でご飯は炊ける。いたずら好きな僕は川とくれば魚取りと話は決まっているのだ。両手両足を匠に使って小魚を浅い所へ浅い所へと追い込み数匹を捕まえそれを飯盒に入れて魚の炊き込みご飯だ～！！と、はしゃいでいたことをはっきりと覚えている。その他、フォークダンスやらキャンプファイアーやらゲームなどをして楽しい時間を過ごした記憶がおぼろげにある。消灯時間が来た。何時頃か分からないが多分21時ごろだと思う。あちらこちらのテントの中でゴソゴソと話し声はまだ聞こえてくるが段々と少なくなって行く。楽しさのあまりか私は少し興奮ぎみで寝付けずにいた。ふとテントの外を覗くと辺りは一色の闇であった。何気なく空に視線を移すと静まりかえった空間に無数の星々が輝き私に覆い被さって来る様にも感じた。これが正に星空と出会った瞬間であった。当時の私には星の知識など乏しい。天の川と北極星がありオリオン座とはくちょう座程度でそれらがどこに有るのかさえもよく分からない。夏の天の川の中にはくちょう座があることは知っていたが多分これだ

ろうくらいである。その迫力のあまりか既に私は魅せられてしまったのでしょう。テントの端から首を出し、手を伸ばして星を掴もうとしていた。手を伸ばせば掴められると錯覚するほどであったのだ。夏の天の川が見事に輝き多分はくちょう座を含む無数の星々であろう星が競い合って輝いて見えたのである。凄いな～！！と、しばしの間見とれていた。その内眠気が来たので床に潜った。

この後は天文とは異なった世界に足を踏み入れることになりしばらくの間、星空との関わりが無かった。我が子が小学生のころハレー彗星とか流星群の時にはシートやらモーフを持って近くの公園まで出掛けて夜空を眺めていたが生活に追われていたのか星空と付き合う余裕が無かった。子供から手が離れて余裕が出て来たのか自分を振り返る様になり、私自身これと言って長続きした趣味が無いな、と考えはじめていた。そんな日々の中仕事が遅くなり気晴らしに外に出て夜空に目を移したがそこには嘗て観た、あの降るような星空は見当たらなかった。「full star. deep field.」と言う言葉が頭の中にふと浮かんた。そうだ、あの子供のころ感動した星空を写真に残せないだろうか？と思い勉強・調査・計画をしはじめた。一旦ことを始めると持ち前の努力と勤勉が功を奏し、また、多くの友人に支えられ着実に実績は上がって行った。



撮影スタイル

1997年に巨大なハールボップ彗星が現れ多くの天文ファンが出現して、いつも私しかない山の上の人口密度が上がった。そんな中で知り合えた

仲間天文のクラブを作ろうという話になり遠州天体写真愛好会を立ち上げた。必然的に各々作品が集まるようになり普段見ることの少ない方々に星空を紹介しようと言うことになった。その方法として写真展を開催することとなり、第1回目の写真展を開催することとなった。私もある一定の成果の集大成のつもりで取り組んだ。その開催期間中、小中学生の一団が現れた。ワイワイガヤガヤ大騒ぎである。嘗ての私を見ている様である。そんな中に一人の中学生ほどの少女が「おじさん」と声を掛けて来たので「お兄さん」と言って欲しいな～っと言い返した。「まあまあ、ちょっと教えて欲しいの..」「お兄さんで分かることなら何でも聞いて」「そう、じゃあ、どうして夜は暗いの？」私はその言葉を聞いて胸がドキッ！！とした。単純に答えれば太陽が沈めば光を失って辺りは暗くなる。でも、これでは答えになっていない。宇宙には一千億個×一千億個の恒星（太陽）があり夜昼に関わらず照らし続けているからである。これを単純に計算すると、およそ16平方秒、これは鉛筆を持った手を伸ばしその鉛筆のとがった芯の先ほどの狭い領域に一千億個の恒星が輝いていることになり、その光で夜は昼間の様に明るくなるはずである。この子に宇宙の有り様をどう伝えれば良いのかとしばし考えさせられた瞬間であった。その子の前に別の2名の子を直列に並ばせて「手前の子は輝いていないとしよう。そして、その向こうの子は輝いていたとしても貴女からは見えないはずだが、」どうですか？と尋ねると「見えない」と答えた。「宇宙はこれと同じ様に私たちの所には、その多くの光が届くことが出来ないから夜は暗いのですよ。」と答えて納得してもらった。しかし、言ってみたものの自信は無く、自宅に帰って輝かざる物がどれほどなのか調べ直してみた。宇宙は輝く物に支配されているのではなく輝かざる物の絶対量で左右される様である。その量は驚くほど多く宇宙全体の90%以上におよぶのではないかと。との予測であり、今なお人間には量り得ないのが事実の様である。この典型的な物にオリオン大星雲がある。写真ではとっても綺麗に輝いて写っているが、この星雲自身ではこの様には輝くことが出来ない。星

雲上部にある、生まれてまもないトラペジウムと云う星の強烈な紫外線によって暖められ光り輝いて見えるのである。この星雲の後方では可視光では観ることは出来ないがオリオン分子雲のガスが濃縮され今、正に原始太陽（胎児）が輝き始めようとしているのである。現代天文学はこの様な姿をも捉えることが可能になり宇宙は正に生きていると実感出来る。



オリオン大星雲



アンドロメダ銀河

およそ二千億個の恒星（太陽）が輝く星の集団であり、我々の銀河と共にあり局部銀河群を形成し、さらに乙女座銀河団の一員として存在する。我々の銀河は互いの重力で引き合い、このアンドロメダ銀河に向かって秒速300Kmもの猛スピードで接近中である。将来、銀河の衝突・合体が起こり爆発的な星生成（スターバースト）が繰り広げられるであろう。

この夏～助産師について

助産学専攻科講師

堀 田 久 美

夏休みを頂いて、久しぶりにお母さん達のサークルに顔を出してみた。十数名の赤ちゃん連れのママ達。懐かしい顔もちらほら。「この子二人目だよ」「上の子は幼稚園になったよ」嬉しい報告。あっという間に時間が戻った。1時間ほど赤ちゃんを囲んで話をしていると、今度はサークルを卒業したママ達が集まってきた。「堀田さんいるって聞いたから」と。参加していたママの誰かが連絡してくれたようだ。嬉しくて涙が出そうになった。

助産所での仕事を離れて、2年半になる。助産所で何人ものママ達と出会った。そして、別れも経験した。地域での助産活動は、出産して退院して終わりではない。といっても、子供が成長して母乳育児の終わりとともに少しずつ遠のいていく。それでいて、何年も連絡がなかった人から突然夫婦喧嘩の報告を受けたりするのも、地域の面白いところだと思う。病院、診療所での経験もあるが、個と個の双方向性の関係をもてる地域での活動が自分には一番合っていると思う。離れていても、繋がってられる。そして、何かあったときにふっと思い出してもらえる存在でいられる。これは、分娩という時間を共に過ごし、その後の育児に関わっていける助産師だからなのだろう。なんて幸せなことかと思う。いつか「あのときの子が結婚することになりました。」と報告を受ける日も来るのだろうか。

最近、何人かの開業助産師の先輩方をインタビューする機会があった。助産師のアイデンティティー形成について考えるためにお話を伺った。結果はまたの機会に報告したいと思うが、いつまでも若いつもりでのんびりしてはいけなくと気持ちが引き締まった。こんなにゆっくりと「助産師とは」、「助産師として」、と考える時間は今までなかったと思う。助産師は、誰がなんと言おうとお産を助ける仕事なのである。当たり前のことだが、正常に経過するお産を介助する。そしてこ

れも当たり前のことだが、たまたま正常に経過するお産を介助しているにすぎないのではなく、正常に経過するように介入し、逸脱を発見し初期の対応をして治療につなげていくのも助産師の仕事である。以前、年配の助産師さんが、「昔のお医者様は難しいお産をいつも助けてくれた。そういう事に誇りを持っていた。さっそうと馬に乗って駆けつけてくれる。かっこいいんだよ。・・・。偉いお医者様が普通のお産なんかに手を出したりしないから、助産婦は正常なお産をしっかりやらないといけなかった。」と言っていた。母子の命を背負う覚悟が今の私達には弱いかもしれない。「助産婦のなりそこないみたいな医者とお産もろくに出来ない助産婦、、、器が違う。」と、、、ひどい言われようだと思ったが、反論できない。悔しかった。

私は、少し前まで分娩介助の技術とか乳房のケアとか骨盤・アロマ・マタニティービクス・ヨガなど、目先の技術をいかに向上させるかという事にしか興味がなく、助産師としての芯になる部分がしっかりしないまま、周りだけを磨こうとしていたのだと思う。助産師が助産師として働けるように、汗を流してくれている人がいたことにも気がつかなかった。これが、器が違う原因かもしれない。今、助産教育に携わらせて頂いているが、学生には今のうちから、芯をしっかり育てて欲しいと思う。私自身、まだまだ発展途上でわからないことだらけ。だから、考えていること、悩んでいることをできるだけ学生と話していこうと思っている。私の悩みや課題を題材に、いっしょに成長していけたらと思う。この夏、助産師として少し大人に近づけたように思う。

海外渡航記

15th International Conference on Cancer Nursing に参加して

臨床看護学講座助教

長 崎 ひとみ

2008年8月17日から21日まで、シンガポールで行われた表記の国際がん看護学会に、共同研究者である講師と共に参加した。本学会では世界各国から看護界の重鎮が参加し、5日間で229口演、262示設が発表された。セッションのテーマは、スクリーニング、症状のコントロール、ホームケア、緩和ケア、サポーティブケア、サバイバーシップ、真実を告げること、患者—看護師のコミュニケーションなどであり、活発な討議がなされていた。中でも本学会のトピックスは、終末期患者のQOLの向上についてや、在宅療養中の患者をいかに教育してセルフマネジメントにつなげるかなどであり、とても興味深いものであった。



学会の様子

私にとって今回が初めての国際学会への参加であり、発表はしなかったが、国際学会の空気に触れ、たくさんのことを感じてくることが目的であった。当然ながら発表およびディスカッションは全て英語で行われていた。私はこの学会に備え、半年前から英会話教室に通って多少なりとも準備をしてきたつもりであった。しかし、予想以上にnative英語は早

く、スライドや抄録を必死に目で追って内容を把握する始末であり、まだまだ英語の勉強不足だと痛感した。しかし、海外の看護界の空気に触れることができ、とても新鮮で刺激的な体験となった。

学会だけでなく、観光も精力的に行ってきた。こちらの方は計画を練り上げ、準備万端であった。シンガポールは赤道近くに位置し、通年30℃の常夏の国である。北京オリンピックの開催時期とも相まって、更に熱気に溢れていた。また、シンガポールは緑が多く、ゴミを捨てたら罰金最高約8万円、公共トイレで使用後に水を流さなかったら罰金1万2千円、落書きしたら鞭打ちの刑という法律があるだけあって、とても美しい街並みであった。マーライオン公園、ナイトサファリ、セントーサー島、チャイナタウン、アラブストリート…と目いっぱい観光を楽しんだ。シンガポールは7割の方が中国系ということもあり、中華料理がとても美味しかった。また、人生で初めてドリアンを食した。噂に聞く通り強烈な臭いを発しているが、一口食べてしまうと臭さなど気にならない程に甘くとろける口触りで、



マーライオン公園にて

すっかりドリアンの虜になってしまった。食べ過ぎて翌日までドリアン体臭に悩まされたのもいい思い出である。

今回の国際学会に行かせていただいたことで、がん看護の研究者としての自覚がわずかに芽生え、研究に対するモチベーションがアップし、次回の学会こそは発表できたらいいなと密かに思った。また、英語はどんなに時間と費用をかけて学んだとしても、それだけではダメで、自分から積極的に他者に話しかけ、コミュニケーションを図る姿勢と勇気が必要であると痛感した。

参加させていただきありがとうございました。



シンガポールの街並み

ヨーロッパ麻酔科学会 2008 (ESA2008) に参加して

手術部准教授

白石 義人

2008年のヨーロッパ麻酔科学会は、デンマークのコペンハーゲンで5月31日から6月3日までベラコンベンションセンターにて行われた。デンマークは最高地点が170 mしかない平坦で肥沃な国土と高福祉国家として有名である。税金は高く物価も高いが、暮らしている国民の満足感が高い。通貨はユーロではなくデンマーククローネ（当時1DKK が25円と円安）を使用している。ホテルは1泊2万円でシングルベット、シャワールームのみで冷房はなし。会期中は晴天続きで暑く、乾燥はしていたがサマータイムと緯度が高いため日暮れが午後10時近くであり暑さが持続していた。

1. 学会場にて

ヨーロッパ全土（東ヨーロッパも含む）、アメリカ、アフリカ、日本、中国、韓国、インドなど世界各国から2,000題に上る演題と8,000人以上の参加者があった。コペンハーゲンだけではホテルが足りず海峡を隔てた隣国のスウェーデンのマルメ（電車で30分程度）に宿泊した人もいた。会場は広く機器展示は経済動向を反映し（これも現時点とは異なる）特に賑わっていた（写真1）。浜松医科大学からは、佐藤教授以下総勢7名が参加し、演題発表は3題であった。公用語は英語であるがnative speakerではないので理解はし易い。ポス



写真1

ターでの発表のみであるが質問は決められた時間に各国の参加者から鋭く突っ込まれる（写真2）。

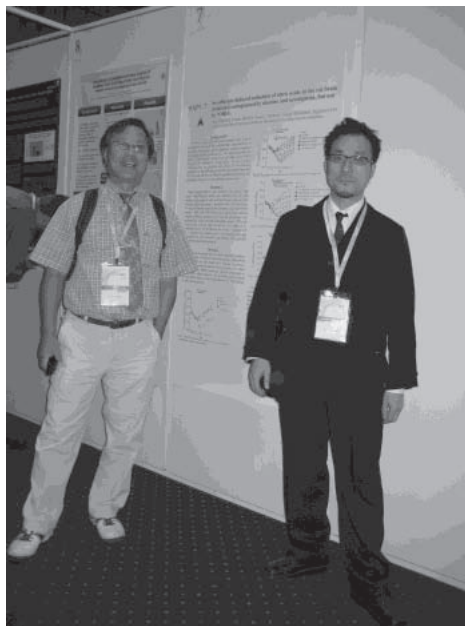


写真2

例年、別の小部屋でもPCプレゼンテーションを行うのであるが今回はなかったので気は楽であった。朝の発表の際は軽食（クロワッサンなど）とコーヒー、そしてティータイムにはクッキーとコーヒーが提供され会場費が高いだけのことはあった。会員の歓迎懇親会が初日に国立美術館（展示物もある程度は鑑賞可能だった）で行われたが、夜の7時から始まり11時過ぎまで延々とお酒を飲みながら熱い議論が交わされた。会場の外でも海外の研究者との交流が行われ昼間のように明るいテラスでディナーを共にしながらの英国研究者との写真である（写真3）。

2. 工場見学

世界的に有名な血液ガス分析器のメーカーであるラジオメータ社に見学と今後の研究に関する意見交換を行った（写真4）。精密な機器を工場ではハンドメイドで製作していた。例えば酸素電極（クラーク電極）のガラス薄膜はベテラン技術者（60歳代の叔母さん）が一人で作製している。いわゆるガラスを吹く作業で、5 mm 径の曲面を微妙な加減で行う。見学者にはガラス吹きを試させるパフォーマンスをすることになっているらしい（私の英語力ではそう聞こえた）。私が挑戦してみたが、膨らむ最初に結構吹く力が必要でそのため



写真3



写真4

つい吹きすぎてガラスのシャボン玉が割れて綿のような状態となり見事に失敗した。今回の訪問の大きな目的の一つは、ベッドサイドのモニターとして（特にICU、CCUで）トロポニンやインターロイキンなどをその場で測定して患者治療などの臨床応用ができないかという可能性を探ることにある。機器の開発計画、日本での承認、保険点数への収載等様々な問題点が討議され今後の課題が検討された。

3. 文化と生活

コペンハーゲンの中央駅に隣接してチボリ公園も有名であるが、遊園地なので中には入らなかった。デンマークと言えばビールメーカーのカルスバーグが一般には有名である。やはり中央駅のそばにカルスバーグ財団による美術館があり、フランス絵画を中心に充実した展示内容であった。前述したウエルカムパーティの開かれた国立美術館も充実しているそうなのであるが、会場として使用された区域以外は見られなかったなのでその全

貌は把握できなかった。市の中心部には、ストロイエという歩行者天国と買い物街のような一画があり大勢の観光客で平日でも賑わっていた。あまり観光する時間はなかったが有名な人魚姫の像は市内なので見に行った。二回も破壊されたという像は意外に小さいものであった。少し離れた所に新しい人魚姫の像という前衛的な像もあると紹介され見に行ったが観光客は誰もおらず先ほどの像とは対照的であった。ともあれデンマークでの週の労働時間は30時間に制限され、国民はゆとりのある生活を送っているようだ。

海外への学会参加は、何らかのカルチャーショックを受ける。今回の経験も直接的な成果は現時点では明確ではないが間接的には色々な意味で刺激を受けてこれからの研究や臨床へのモチベーションが高まったことは事実である。

ポルトガルのポルトでポルテ

整形外科講師

高橋 正 哲

平成20年5月19日から26日までポルトガルのポルトで開催されたESSKA（European Society of Sports Traumatology, Knee Surgery, and Arthroscopy）に参加、発表（ポスター）してきました。この学会は無理矢理、日本語に訳せば、欧州スポーツ傷害・膝関節外科・関節鏡学会ということになります。専門でない方には、奇異な学会に聞こえるかもしれませんが、整形外科の分野にはこの手の合同学会が最近多く、この学会以外にも、世界的にはISAKOS（International Society of Arthroscopy, Knee Surgery, Sports Medicine）があります。日本でも3年前から、日本膝関節学会、日本関節鏡学会、日本整形外科スポーツ医学会3学会の合同学会としてJOSKAS（Japanese Orthopedic Society of Knee, Arthroscopy and Sports Medicine）が開催されています。

ポルトは首都リスボンに次いでポルトガル第2

の都市で、国名のポルトガルの元になった都市です。ポルトガルが14、15世紀に世界の海を制覇した時代に中心地として栄えました。その時代の街並がポルト市内に現存しており、同地区は世界遺産になっています。坂が多く、建物の間に無数の小路が走り、赤を基調とした街並が美しい。学会場は美術館が使用されましたが、これは日本ではあまりないのでは。会場（美術館）のすぐ横を、市内を貫通するドロウ川が流れていて、会場を出て風にあたると気持ちよかったです。ドロウ川沿いをホテル方向に歩くと、ドン・ルイス1世橋という鉄橋に行き着きます。この橋は、建築史上大変意義のある橋だそうです。この川沿いには、レストランがいくつかあり、一度学会の帰りに夕食を取りました。学会場からホテルまで、歩いて30分位なのですが、よく歩きました。また、市内はこじんまりしているので、どこでも歩いて行きました。こんなに歩いた学会はないでしょう。同行の1人はサンダル履きでいつも遅れていました。

また、ポルトはポートワイン（ポルトワイン）発祥の地です。ポルト市内のワイナリーに坂を上り小路を歩き見学に行きました。ポートワインは、通常のワインにアルコールを加えて発酵を止



坂と小径と遠方に世界遺産

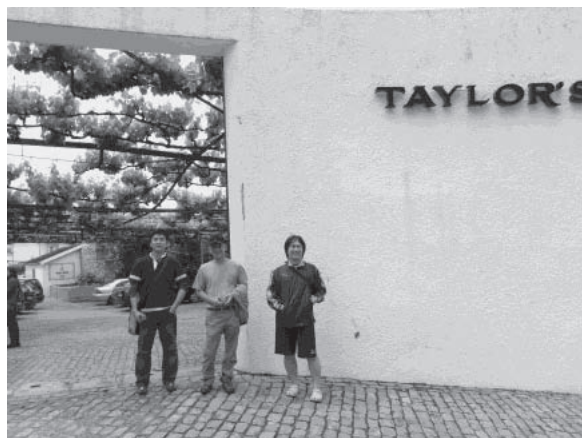


学会場の前

めて製造するのでアルコール度数が高く重厚な味です。ポートワインは甘いものと思っていましたが、甘くないのが普通だそうです。レストランでせっかくだからとポートワインを注文したら、食後酒なので、まずは普通のワインを飲めと断られました。また、ドロウ川上流にワイナリーが集まっており、川沿いに走る列車に乗って訪ねました。途中の渓谷の景色はすばらしかったです。確か、鉄道は途中までしか電化されてなくて、遠くまで行く我々の列車はディーゼルでした。

サッカーがポルトだけでなくポルトガル全体で非常に人気です。ポルトはUEFAチャンピオンズリーグとインターコンチネンタルカップ（トヨタカップ）を2回ずつ制したことがある強豪FCポルトの本拠地です。我々が滞在中にUEFAチャンピオンズリーグが開催されていたこともあり、毎日朝晩に1時間ずつサッカーのニュース番組が放映されていました。FCポルトの本拠地、ドラゴン競技場にも見学に行きましたが、その日は競技場内には入れず、スタジアムのショップでお茶を濁しました。

私のポスターの隣で発表していたポルトガル人の整形外科医から聞いたのですが、今回の学会の会長は、スポーツクリニックの院長で、スポーツ



ワイナリー入り口

整形外科で有名で、患者も多く、クリニックもたいへんにぎわっているそうです。また、父親がポルトガルでは昔から有名な整形外科医だそうです。学会には南アフリカ共和国のドクターもたくさん参加していて意外でしたが、ポルトガルと親交が深いのでしょうか。

ホテルは日本の旅行会社に頼んだら全然取れなくてあせりました。出発の2週間前になっても、航空券しか手に入っていません。しかし、インターネットで調べたら、安いホテルはいくらでもありました。最初にポルトがスパ（温泉）もあるというので、スパ付きのホテルを頼んでいたのも予約がとれなかった理由だったようです。我々が泊まったホテルは3ベッドのセミスイートで1泊1部屋、約1万円で格安です。途中、もう1人合流し、彼が3泊したのですが、なぜかエクストラベッド代（3千円位）は1泊分でよいとのことでした。これは1泊分というより、1ベッド分の料金？

ポルトガル料理ですが、これは？最初は失敗の連続です。まず、英語のメニューがありません。例えあったとしても、英語のメニューで決めて、これと注文すると、今日はないと言われます。ポルトガルのレストランでは大概、曜日毎に全メニューが変わるそうです。もちろんポルトガル語のメニューはその日のものです。で、結局、その店で、英語が最もできるというウエイターが来て、説明を聞いて注文するのですが、まず、想像していたものは出て来ません。とにかく、どの料理にも大量のポテトが付いて来ます。失敗の連続

でしたが、段々、わかってきて、最終日に近づくに連れ、的確な料理を注文することができるようになりました。まあ、近くの人々の料理を指差してアレと言うのが一番かな。しかし、見た目と味が全く違うこともありますから。食事の度に意図した料理が出て来なくて、やけになっていた同行の1人（サンダル）は、いつも10秒位で、勘で決めて毎回失敗して、我々を笑わせてくれました。また、同行の1人（ボウズ）は、写真が趣味の1つらしく、毎日、500枚くらい撮っていました。ここに載せた写真は彼から貰ったものです。もっとたくさんあるのですが（なにしろ毎日500枚）、紹介できないのが残念です。

さて、ここまで読んで来られて、題名のポルトでポルテのポルテはなんだろう、車か？とお思い

かもしれませんが、特に意味はありません。題をつけていて語呂がよくポルトでポルテとなってしまうしました、すいません。



ポルトの猫



世界遺産を見渡す橋で

慶北大学校医科大学 (韓国)での臨床実習

医学科 6年

橋 口 俊 太

この度、4月7日から5月2日の期間、韓国の慶北大学校医科大学にて選択臨床実習をする機会をいただきました。選択した科は小児科(2週間)、脳神経外科(2週間)の、計4週間です。慶北医科大学病院は韓国第3の都市、大邱市にあり、市内の中でも中心地にあるため、周りには多くの高層ビルや飲食店が立ち並んでいました。総合大学であり、その中で医学部だけがキャンパスが独立しており、メインキャンパスはさらに車で15分くらい離れた場所にあります。総学生数は2万を越えるという巨大な大学でした。医学部に関しては1学年110人程度ですが、現在ちょうど大学院化された直後で、学生は別の大学を卒業し、さらに4年間医学部で勉強した後、国家試験(KMLE)を受験するといった流れになっています。また病院はダウンタウンといわれる市内の繁華街に近く、レストラン、ショッピングにと交通の便が非常によい場所に立地していました。

★小児科(4/7～4/18)

PKポリクリ班は3人グループであり、各週でそれぞれ異なるグループで実習させていただきました。小児科の実習期間は4週間だったのですが、私のスケジュールは2週間であったため、変則的にスケジュールを組んでいただきました。1週目はlectureと病棟中心実習で、2週目は外来中心実習でした。また、2週目では1回、当直実習もありました。毎朝、8:30からカンファレンスがあり、ここでは特に新患について各レジデントの先生がプレゼンをします。学生は実習期間中、最低1回以上自分の担当するcase(病例)についてプレゼンを行います。毎回、上級医から必ず質問があり、それに備えて学生は事前かなりの予習をする必要があります。このプレゼンに関しては、私は一人の学生とcaseを共有して、一緒に勉強しました。また、脱水に関する講義では他の学生同様、宿題が出されたりもしました。しかし、小児

科での実習の最大の山場は、2週目のcase presentationでした。これは、一人一人にcaseが与えられ、それについてpptを作成し、さらに疾患についてのdisease review reportを作るというものです。通常プレゼンは韓国語で行うのですが、今回、私のために特別に英語でプレゼンをすることにいただきました。これは、自分にとってももちろん初めての経験であり、準備の段階から非常に苦労しましたが、先生方や学生のサポートのおかげで何とか仕上げることができました。小児科には学長(循環器)を始めとして、各専門分野である循環器、消化器、腎臓、神経、血液・免疫、新生児領域に計6名の教授がいらっしゃいました。講義や外来で各教授から色々と教えていただく機会があり、また学長自らも診療を行っており、先天性心疾患について図解していただいたりしました。小児科医師の割合としては、女性の割合が高く、8割は女性医師であったと思います。入院患者数も多く、全国各地から患者が紹介されてくる中心病院でした。

★脳神経外科(4/21～5/2)

脳神経外科の実習は通常では一週間であったため、私は2週間はほぼ同じ予定にて実習させていただきました。これは自分にとっては復習をすることができ、2週目はある程度余裕を持って実習することができました。PKメンバーは1週目は3人班、2週目は2人班でした。

脳神経外科ではbrain teamとspine teamの2つのグループに分かれており、学生は2つに別れて実習し、週の半ばで交代するというシステムでした。毎朝7:30に病棟に行き、配属されたチームに分かれてカンファの準備をしました。その後、8:30からmorning conferenceがあり、ここでは教授を含めてスタッフが全員集まり、当日のオペ患者、新患についてレジデントがプレゼンをします。ここでも、毎回教授からは質問が飛び、活発な議論が行われていました。今回は私のために英語でプレゼンをしていただきました。その後は回診があり、そのままほぼ毎日オペに入りました。手洗いをさせていただいたのは1回だけでしたが、その分多くの種類の手術を見学することができました。術者はオペ中、オペ後に必ず学生に対

して質問をしてくるため、こちらはしっかり手術の内容を把握する必要がありました。見学した手術数は2週間で20以上でした。

初めて見るようになった手術もたくさんあり、非常に勉強になりました。これだけ手術数があるのも毎日3～5種類の手術が組まれているからです。脳外科での実習中の課題はcaseについてのカルテ作成、疾患についてのレポート、あるテーマについて5つ以上の英語の文献を読みまとめるレポート、PBLcaseについて検討、そして一番の山場は当直実習の翌日のプレゼンでした。これは、前日の夜にcaseが与えられるために、夜中にかけて準備をしなければならず、睡眠もほとんどとれませんでした。また翌朝は大勢のスタッフの前で英語でプレゼンするという経験をさせていただきました。非常に緊張しましたが、何とかこなすことができました。しかし、質問に対しては英語力の無さや、勉強不足からうまく答えられなかった部分もありました。概して脳外科の実習は朝早くから夜まで長時間かつ課題も多くハードな内容でしたが充実した2週間でした。

★総括

4週間先生方や学生に常に助けられ、無事に終わることができました。慶北医科大学病院は韓国でもNo.3に入る有名病院ということで、設備や、スタッフ共にハイレベルで、実習についても自分で想像していたものよりもハードな内容でした。例えば、設備については病院内に24時間利用できる食堂や、コンビニが完備されていました。病院のシステムや実習の内容などで日本と大きな違いは感じませんでしたが、学生について最も感じたことは医学用語を英語で勉強しており、英語で理解し、覚えているという点でした。教科書も洋書を使って勉強しているし、論文を読むことに關しても非常に慣れていました。常に日本語で勉強してきた自分にとってはちょっとした簡単なことが英語では表現できずに、常に辞書が手放せない状態でした。教育制度の違いはあると思いますが、将来最新の情報を文献から得たり、海外で勉強する際に、学生の頃から英語で勉強するシステムは優れていると思いました。

今回反省すべき点としては、韓国に行くにあた

り、もう少し韓国語を勉強してから行くべきであったということです。英語については片言の英語でも何とかコミュニケーションできましたが、一歩大学の外にでると、ほとんど英語は使えず、しかも韓国語が読めず、話せない自分はなかなか単独で行動範囲を広げることが難しかったです。しかし、そんな中でも休日などはPKメンバーに車で市内の観光地に連れて行ってもらったり、実習だけでなく、それ以外でも充実した4週間でした。

最後になりましたが、今回韓国に行く機会を与えてくださいました本学関係者の皆様、慶北医科大学の李相範学長、小児科、脳外科の先生方、整形外科の金豊澤教授、一緒に勉強してきたPKのみんな（特にMr. Hong Han Pyo）、日本人学生の高平さん他、多くの方々にお世話になりました。また、現地での宿泊から生活のサポートまで大学のスタッフの方々にしていただきました。短い期間でしたが、多くの方々にお世話になり、心から感謝しています。今回、臨床実習という目的での短期留学でしたが、自分にとって最も大切な収穫は実習を通じて、多くの友人ができたことだと思います。国を超えて友達ができるということはとても素晴らしいことだと思います。始めは正直不安もありましたが、今は非常に貴重な経験ができたと思っています。これからも慶北医科大学と浜松医科大学との交流が末永く続いていくことを祈念いたしまして、報告書とさせていただきます。



慶北大学校医科大学小児科PKメンバー
前列右から Mr. Hong Han Pyo、筆者、金幸美教授

卒業生だより

看護学科入学から卒業後の軌跡

看護学科 1 期生
(平成11年 3 月卒業)

辻 村 真由子

看護学科を卒業後、早10年目となります。この7月より、千葉大学看護学部訪問看護学教育研究分野の助教に着任いたしました。浜松医大のことを思う機会が増えてきたところにニュースレターの原稿依頼をいただきましたので、これを期に、看護学科入学から現在までを振り返りたいと思います。

1. 看護学生時代

私たちは1期生であったため、4月の頭に入学試験を受け、4月末に入学するという、大変イレギュラーな、そして慌しい大学入学を経験しました。センター試験なしで受験できるということで、すでに他校に入学が決まっていた方、浪人生生活をはじめていた方を含め、6倍近くの倍率であったと記憶しています。激戦を経て(?)、北は北海道、南は宮崎まで、全国から個性豊かな学生が集まりました。

入学してからは、当然ながら看護学科の先輩がいないため、授業や実習、国家試験対策などなど、何につけても常に先の見えない状況にありました。しかしその状況のおかげで、先生方の研究室に頻繁に出入りしてお話をしたり、各領域別実習が終わるたびに先生も交えて打ち上げをしたり、小人数で集まって国家試験対策の勉強会をもったりと、先生と学生、学生間における、密な関係がつくられたのではないかと思います。特に、卒業研究を行った地域看護学の石垣和子先生のゼミにおいては、研究室で鍋をしたり、先生の冷蔵庫にあるものを留守の間に食べたり、パソコンの共有方法でもめたりと、研究に苦しみながらも楽しい日々を過ごさせていただきました。

バドミントン部での活動を通しては、医学科の

先輩方や他の学年とも親交を深めることができました。医学科の先輩のご指導のおかげで、高校時代には万年1回戦負けだったバドミントンの実力が、いくつかの大会で上位入賞を果たすまでにしました。部における苦しい練習で培われた体力、気力、精神力は、その後の臨床看護師時代、大学院生時代にも大いに役立ちました。

2. 臨床看護師時代

卒業後は、浜松医大の附属病院に就職するか迷いましたが、将来的に訪問看護を行うことを考慮して、より多く実践を重ねて看護技術を身につけようと(短絡的に)考え、地元の豊橋市民病院に就職しました。整形外科・不妊センター病棟に配属され、整形外科疾患、リウマチ、交通外傷などの患者さんや、人工授精を受ける患者さんの看護にあたりました。

就職して3年目となり仕事が楽しくなってきた頃、近況報告のつもりで石垣先生に、「なんとか仕事をこなしています」というメールを送ったところ、「こなしているという感じなのですね」というお返事をいただき、こなしている状態というのはあまりいい状態ではないのかな、そろそろ次のステップに進む時期なのかな、と考えはじめました。

3. 大学院生時代～現在

仕事が楽しい時期で新しい環境に身を置くことへの躊躇もあり、少々悩みましたが、介護する家族のために役に立つことが何かできればという思いから、4年間の臨床看護師経験の後に千葉大学大学院訪問看護学教育研究分野に進学しました。

大学院入学後は、非常勤で訪問看護師として働きながら再び石垣先生のご指導のもと、訪問看護実践における排便ケア、介護する家族への支援、日本と韓国・タイとの看護実践の国際比較などの研究に取り組みました。5年間の大学院生生活を経て、現在に至ります。教員という新たな立場で学生さんに教わりながら、まだまだ修行、修行の日々を送っています。

4. 現在思うこととこれから

千葉での生活も6年目になりますが、冒頭で述べたように最近母校のことを思うことが増えています。1つは、看護学科の同窓会が医学科から独立することになったことです。1期生の卒業後10年目となり、そういう時期が来たのかと感じるとともに、みんなで盛り立てていかなければと思っています。もう1つは、卒業10周年の節目を迎えるにあたり、1期生で同窓会をやりたいという話が出ていることです。浜松の地で、同級生やお世話になった先生方と楽しいひとときを過ごせたらと、思っています。



石垣先生、中国からの留学生の胡秀英さんと、タイの病院を訪問しました（右から2番目が筆者）

広がる浜松医大の輪

看護学科 1 期生
(平成11年 3 月卒業)

ロゴム 尚 子

浜松医大を卒業して10年近く経ちます。早いものです。

私は浜松医大看護学科を卒業した後、東京都新宿区にある東京医科大学病院に就職しました。東京という街に住むのは初めて、看護師としても1年目。当時の私はとにかく自分の置かれた状況について行くことが精一杯でした。

私が配属されたのは血液内科、神経内科、内分泌内科の混合病棟。自分が希望した病棟でした。しかし、その病棟、とにかく忙しい病棟でした。工作中、常に私の頭と体はフル回転。辛いことは本当にたくさんありました。もう辞めたいと思ったことは何度もありました。それでも辞めずに頑張れたのは、支えてくれた同期や素敵な患者さんたちとの出会いだったと思います。あの時、あの場所で出会えた方々には、今でも本当に感謝しています。

さて、その混合内科病棟で5年勤務した後、私は異動希望を出しました。病棟勤務時代に「慢性疾患で入退院を繰り返す患者さん」のケアに携わらせてもらいましたが、今度は「入院中から退院後の移行期の患者さん」や「在宅療養中の患者さん」に携わりたいと思ったからです。そして希望通りの部署へ配属してもらいました。そこは、「退院支援」「訪問看護」「看護相談」を行う部署でした。

その部署での勤務はとても充実していました。しかしその反面、これから私はどうしていいかという思いが湧いてきました。ちょうどそんな頃でした。友人から浜松医大の老年看護の助手の話聞いたのは。

その後、浜松医大の老年看護の助手に着任させていただけることになりました。もともと高齢者が大好きでしたし、自分の臨床経験を生かすこともできたので、私にとって老年看護の助手はとて

もやりがいのあるものでした。そして何より母校で働けることが私は嬉しかったです。私たち1期生がデザインしたユニフォームを今も変わらず在校生が着ているのを見た時は本当に感動しました。

今、私は千葉大学大学院訪問看護学教育研究分野の博士前期課程に在籍しています。浜松医大の学部生時代にお世話になった石垣和子先生の元で勉強しています。千葉大学大学院には浜松医大の卒業生が何人かいます。浜松市から遠く離れた千葉市ですが、ここでも浜松医大の輪は広がっています。

浜松医大の卒業生とは、今も時々プライベートで会うことがあります。私の周りの卒業生は、皆、今も変わらず看護に携わる仕事をしています。出産や育児で一時的に退職している友人もいますが、そんな彼女たちもこの間までは、看護の世界で活躍していました。

今後、何年かしたら、浜松医大の卒業生で、看護界を引っ張っていくような方が出てくるかもしれませんね。楽しみです。

これからどんどん卒業生が増え、益々、浜松医大の輪が広がっていったら良いなと私は思います。



左から筆者、石垣先生、辻村先生（浜松医大看護学科 1 期生）

拝啓 沖縄より。

医学科20期生
(平成11年3月卒業)

畔 越 陽 子

皆様ご無沙汰しております。浜松医大卒業後、横浜市立大学泌尿器科を経て現在沖縄に住んでいます。沖縄に来てはや4年。最初は気候や風習に戸惑うこともありましたが、今ではもうすっかり慣れて双子の子供達と一緒にこちらでの生活を楽しんでいます。

現在私が所属する琉球大学医学部臨床薬理学講座は、学内でも比較的新しい教室です。教授の植田真一郎先生は、心血管イベントのリスクファクター管理を専門にされています。その他循環器専門の教官方がいる自由な雰囲気のある教室です。主な活動としては、血球や血管内皮・インスリン感受性についてのhuman study、臨床研究者やCRC（臨床試験コーディネーター）の育成、その他医師主導型臨床試験であるDIME（Diuretics in the management of essential Hypertension）studyの主宰などを行っています。教室の規模は小さいですが、多岐にわたる活動を行っています。

私は、ヒトでのレニンアンジオテンシン系と血管内皮機能・インスリン抵抗性について研究しています。脂肪製剤の静注による高遊離脂肪酸血症状態、塩分制限食摂取によるレニンアンジオテンシン系活性化状態での血管機能・インスリン感受性の変化や薬物介入による影響について調べています。Human study なのでボランティアのリクルート、検査説明、同意取得を行います。外来患者さんとは違う、健常ボランティアの方々へ説明を行うことはまた臨床とは違う苦勞もありますが、いまどきの若者の考え方を学ぶことができ楽しい時間でもあります。

泌尿器科から腎臓高血圧・循環器系臨床薬理という異なる分野の教室へ来たことでいまだにわからないことも多いのですが、周囲のお助けにより研究を続けることができ、学会発表もさせていただきました。たとえどの分野に進もうとも、医者

である以上、常に新しいものや異なる分野のことも積極的に取り入れて学習していかなければいけないのだな、と今更ながらですが痛感しています。そういった意味では、他分野で一定期間学ぶということは非常に有意義であると思っています。

さて、私にとっての沖縄名物について少し話したいと思います。皆さんは沖縄と言うと何を想像されるでしょうか？私が沖縄に来て最も気に入っているのが、うちなー（沖縄）自慢の泡盛です！沖縄県内には泡盛を造る酒造会社は何と48社もあり、それぞれ特色のある泡盛を造っています。特に、長年寝かせた古酒はまろやかで深い味わいがあり、とてもおいしいですよ！沖縄の長くて暑い夏、一日の終わりに泡盛を飲む、というのは自分にとってとても幸せな時間です（もちろん、毎日ではありませんが・・・）。はじめはすっかりした味わいの泡盛をお勧めします。最初はちょっとクセがあるかな？飲みにくいかしら？と思うかもしれませんが、杯を重ねるごとにおいしく思うようになり、最後はまた飲みたいなあ、と思ってしまいうでしょう。皆様も沖縄へお越しの際は是非沖縄自慢の泡盛を飲んでみてください。



沖縄写真館

編 集 後 記

本日、今年度第1号のニュースレターをお届けすることができました。お忙しい中、ご執筆いただきました皆様に感謝申し上げます。例年に比べ、とりかかりから遅くなってしまい、10月号がずいぶん遅い発刊となってしまいましたことをお詫び申し上げます。

さて、今年度は、寺尾俊彦学長よりいただきました「助産学専攻科の設置」にあるように、本学に助産学専攻科が設置され、教育が開始されました。看護学科は来年15年目を迎えることとなりますが、これまで通り、また今後は卒業生の皆様からもさらなるご支援をお願いしたいと思っています。

海外医学・医療事情、寄稿、さろん、海外渡航記、卒業生だよりでは、教職員、卒業生、留学生、在学生の方々から、研究、趣味、実践でのご活躍の状況をご紹介いただきました。これまでこれほど隔から隔までじっくりとニュースレターを読んだことはなかったのですが、皆様の熱意や意気込みが感じられるご報告に、短時間でパワーをもらうことができたように思います。ぜひ隔から隔までご覧いただければと思います。特に個人的には、看護学科同窓会の設立や看護学科1期生からの卒業だよりの中の卒業生の頼もしいご報告に思わず涙がでる思いで読ませていただきました。

編集部会では、「メインテーマ」は全体のメインテーマにはなっていないのでおかしい・・・というようなことが話題となり、「メインテーマ」といった目次の記載を今回外しました。ニュースレターの構成や内容についても、もっと魅力あるものにしていきたいと考えておりますので、皆様からのご意見や原稿をこれからもお寄せいただけますようお願い申し上げます。

ニュースレター編集部会長

野澤明子（臨床看護学）

小誌をご覧になったご意見・ご感想を
お寄せください。

浜松医科大学ニュースレター編集部会編集

〒431 - 3192 浜松市東区半田山一丁目20番1号

<http://www.hama-med.ac.jp>

e-mail: ssb@hama-med.ac.jp
